
夢のはざまで笑う化け物

トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のはざまで笑う化け物

【Nコード】

N5858S

【作者名】

トロ

【あらすじ】

371万8917名。飛行船事件と後に名付けられる悪夢の起きたロンドン。瓦礫と果てた街に降り立った遠坂凜は、瓦礫の大地に紛れた異質の欠片を手に掴んだ。

「欲しいものは？」

「夢のはざまの終焉を」

赤々赤々。深紅の化け物は今宵、英雄達が戦場を、鼻歌まじりに闊歩する。

この小説はFateとHELLSINGのクロス二次創作です。
Arcadia様にも投稿しています

【one more dream】

371万8917名。この時点ではまだ確認されてはいないが、後に別名飛行船事件と呼ばれる一件にて、ロンドンではこれ程までの死者が出たわけである。

内、時計塔に在籍していた魔術師も半数以上が死亡。これは魔術協会始まって以来の大事件となり、来年にはここで魔術を研鑽しようとしていた遠坂凜にとっては頭の痛い大問題というわけだ。

「……つたく、まさか本当にこんな有り様だなんて」

飛行機、バスを使い、徒歩で向かい到着したロンドンの荒れ果てた大地を見て、凜は頭を抱えなくなるのを必至で堪えた。

ただでさえ地元ではビッグイベントが控えているというのにこの状況。時計塔が堕ちたと聞いたときは何の冗談かと思ったが（事実、時計塔の機能事態は堕ちてはないが）、成る程、この様では暫く『まともには』動けばしない。

「ハア……聖杯戦争も近いっていうのに」

ここに来るまでに何度呟いたかわからない言葉を口にする。凜本人には珍しく、やや弱気になってしまうのも無理はない。

そう、聖杯戦争だ。普通ならこの時期、どのようなサーヴァントを召喚するか、そこから編み出す戦略や、他のマスターの情報などを集めるのが常識である。

遠坂凜は、今回の聖杯戦争に参加するマスター候補だ。体にはもう既に令呪と呼ばれるマスターとしての印も浮かんでおり、本来ならマスターらしく上記のことをしていなければならない身である。

だがここで時計塔再建を手伝い、貸しを作っておくメリットや、あわよくば時計塔秘蔵の聖遺物でも借りられたらと思いついて来たはいいが、この惨状では、むしろ聖杯戦争に間に合うかどうかすら怪しい。

まあ一度やると決めたからには全力を尽くすのが遠坂凜が遠坂凜たる証である。弱音はもう吐くまい。脳裏の気だるさを吐き出すように深呼吸を一つ。

「よし！ それじゃまずは受付……ん？」

時計塔に向かおうとした矢先、凜は妙な違和感を感じて足下を見た。

「黒い……石？」

違和感に導かれるまま、足下に落ちていた一センチにも満たない小さな石を拾う。

そして、凜は見た。

黒い闇の中を歩く骸、滲み出す地獄、沸き立つ戦禍、延々と続く銃声の中、群れなす悪夢を一人一人丁寧に食い潰すのは、犬歯の伸びた長髪の吸血

「ッ……！？」

知らず流れた汗を感じて、凜は自分に戻ってこれた。

「今のは……」

何だ、と言いつつになつて口を閉じる。

強烈なイメージは、思い出すのも頭が痛い。だが、そう、そうだ。
例えるならばあれはそう

「まるで、戦争」

ああ、その言葉こそ相應しい。

そして、遠坂凜は召喚する。

「ところであなた、真名はなんて言つたの？」

本物の化け物。

「今の呼び名でよければ」

死徒ではなく、本物、純正の吸血鬼。

「へえ、教えてくれる？」

それは存在そのものがインチキ極まりなき存在。

「arucard。アーカード、と」

赤は血を連想させる。魔性の色は今宵、運命の闇をただひたすら
に嘲笑う。

「欲しいものは？」

「夢のはざまの終焉を」

汝、運命の夜を越えたくば、
広がり続けるあきらめを、
ただひたすらに踏破せよ。

【プロローグ・1】

違和感は対峙と同時だった。

全てのサーヴァントと戦い、生還することを令呪で命令されたランサーは、今宵もまた敵サーヴァントと遭遇を果たしていた。

赤い赤い、赤い男だ。いや、今まで相対してきた敵からの経験上、今日の前にいる敵は、男というよりは 化け物、そういうものなのだろうな、とランサーは当たりをつけていた。

だがそれくらいならば違和感など気にすることはないだろう。

ならば何故自分は男を、アーチャーと名乗った化け物に言い様のない違和感を感じているのだろうか。喉元に骨を引っ掛けたようなもどかしさは、常より少し槍の精彩を欠かせる。

馬鹿が、と、雑念を振り払いながら槍を放つ。貫く血肉、噴出する血液で深紅の槍をより赤と濡らしながら、槍に付着した血液の分だけ雑念は積もる。

違和感ほ、肥大する。

英霊のはずが、銃を持っているからか？

なわけあるまい。近代の英霊がいても可笑しくはない。

槍で貫いても笑いを絶やさぬからか？

馬鹿な。戦いとは、高揚を持って刃を交わすが常。であればその笑みもまた必定。

では、俺が感じる違和感は何んだ？ 爆音と共に放たれた弾丸を容易く避け、返しの刺突で眼球を抉ったランサーは、片目の様になったアーチャーから距離をとった。

死地を超えたアーチャーの体がグラリと揺らぐ。赤いコートを濡らす流血は、既に本来の赤すら塗り潰す勢いだったが、しかしアーチャーはダメージなど気にした素振りを見せない。

「よく避ける。流石は英雄と云うべきか」

ランサーが距離を取ったのを見て、アーチャーは二丁の拳銃（というにはあまりにも馬鹿げた大きさのを）のマガジンを慣れた手付きで取り換えた。

「まるで当たらんな」

「生憎、武器の形が変わっても、それが飛び道具な時点で、当たる気は更々しないんでね」

「成る程。逃げるのが得意というわけだな」

ランサーの説明に、アーチャーはランサーの槍によって幾つもの穴が開いた体を揺らし、愉快だと笑みをより深くした。

ランサーの眉がアーチャーの言葉に揺れる。自負すべき能力を、逃げ足の一言で断じられたランサーの怒りは、握り直された槍を見れば瞭然か。

「アーチャー！」

その背後でマスターの凜が声を張り上げるが、心配してくる凜な

ど意に返さずアーチャーはランサーを見る。

「しかし、これだけではあるまい？」

そして、まだ足りぬと、言外にそうアーチャーは呟いた。

「……ああ、とりあえず、な。テメエは何処か胡散臭え、悪いがここで決めさせてもらう」

その挑発とも呼べる言葉に応えるように、ランサーは槍を構え直し、その矛先を大地へと向けた。

瞬間、空気が反転する。周りの冷気を、あるいは熱気を、ランサーの槍は次々に貪っていく。それが宝具の発動の予兆であることは、誰の目から見ても明らかであった。

凜は緊張からか息を飲み、それからアーカードと名乗った自らのサーヴァントの背中を見た。

はたして、その背中は何を語っているのか。あやふやで、しかし真っ直ぐで、どこかひねくれていて、あまりにも歪な背中に

「刺し穿つ ゲイ」

ランサーの声に意識が現実へと戻される。魔力の塊を吐き出したかのような言葉と同時に、それ以上の濃密な死が、魔力となって凜とアーチャーの体を圧した。

そして悟る。ああ、自分のサーヴァントは、間違いなく今死ぬのだ、と。

「死棘の槍 ボルク！」

放たれる魔槍。因果を逆転させ、確実に敵の心臓を貫く、必殺の

一閃。

それはアーチャーに抵抗などまるでさせないまま、静かにその心臓にあたる部分を貫き

ランサーはそして、違和感の正体に気付いた。

「素晴らしい！　素晴らしいぞ！」

槍に貫かれた体をランサーに持ち上げられたアーチャーは、心臓を貫かれたというのに、大きな声を張り上げた。

そういうことか。ランサーの口元にも僅かな笑みが溢れる。

「私の心臓を抉って穿つ！　これだ！　たまらない！　実にたまらない！」

「俺の槍を受けて死なねえってのは不愉快だが……いいな、テメエ。そうかよテメエ！　ああ！？　アーチャーよお！」

ランサーは槍を引き抜くと、笑うアーチャーの脳天から股間までを、一振りで寸断した。

「アーチャー！？」

凜がたまらず声を張り上げた。自身のサーヴァントのあまりにも無惨な姿に目を見張る。

だが普通なら空気に溶けて消えるはずのアーチャーの体は、何故か中空で静かに停止していた。まるで時を止めたかのように微動だもせぬ体。同時、分割された一つ目が、ギョロリとランサーの目線と交差した。

「拘束制御術式。第一号、第二号、第三号……解放」

声を発するはずもない口が声を発する異常、炸裂する魔力、凜は自身の体から次々に吸われていく魔力の、そのあまりの量にたまらず膝をついた。

「な、に……これ？」

魔力、いや、命が吸われているような感覚に凜は目眩を覚える。しかし、類いまれな精神がそこで意識を失うという選択肢を放り投げた。自らのサーヴァントが戦う中で、一人眠るなんて馬鹿げてる。ふらつく視界、それでも意識を保ちながら、凜は確かに見た。アーチャーの体が周りの闇と同化していくのを。

そしてその闇に現れるのは無数の瞳、出来の悪いモニュメントのような瞳が、ただ無感動にランサーを捉える。

違和感がなくなる。ランサーは、遂に姿を表した化け物と、晴れ晴れとした気持ちで対峙を果たす。

そうだ。答えは最初に出ていた。あれは化け物なのだ。純粹に、ひたすらに真つ直ぐに、愚直なまでにくだらなく化け物なのだ。

違和感の正体は単純にして明解。本来、反英雄と呼ばれ、果てが化け物であったものも、召喚の際は人としての形で呼ばれる。ランクに嵌め込まれるのがこの聖杯戦争のルール。

だがしかしこいつは違う。アーチャーという枠組みに捕らわれて尚も化け物という矛盾。

英雄ではなく、ひたすらな化け物である違和感。

「ハッハア！ 来いよ化け物があ！」

その違和感がなくなった今、ランサーは吠える。

化け物よ！ 化け物よ！ ひたすらなまでに化け物な化け物よ！

「その心臓、貰い受ける！」

異形を前に、英雄は英雄として相對する。その強き信念を前に、化け物は影の中、穏やかなる笑みを浮かべた。

「始めよう人間 ヒューマン。化け物と人の甘美なる闘争を」

始まるは、一心不乱の闘争。月を背に、おとぎ話は幕を開け

「ッ！？ 誰だ！」

空気を読まぬ道化師が一人。今宵の宴はただの狩りへと成り下がる。

英雄とは、人の身でありながら誰にも叶わぬ願いを果たせた者、諦めを諦めた者のことを呼ぶ。ならば、化け物たるアーカードもまた、一人の英雄であつて然るべきはずだが、彼は化け物だった。永遠に化け物であらんとした。

だからアーカードは倒されなければならない。化け物として人間に、五百年前のように、百年前のように、明けの陽射しに焼かれながら、アーカードは倒されるべきなのだ。

それは化け物に残された唯一の希望である。心の臓を抉られるその刹那を望む。

いつまでも、いつまでも、未来永劫がその過去を食い潰す日を夢

見て。

『故にマスター。私の望みはただ一つ、私の夢のはざまを終わらせる存在だけだ』

「……ふーん」

夜の冬木市を歩きながら、何ともなしに聞いたアーチャーの望みを聞いて、凜はどう答えればいいかわからずに空返事を返した。

ランサーとの戦いから、今は暫くの時間が経っていた。

要約すれば学友の衛宮士郎が聖杯戦争のマスターで、学校にてアーチャーとランサーの戦いを目撃し、口封じに殺され、凜が復活させたらまた殺されかけて、何故かセイバーを召喚して凜ちゃんくやちー。以上。

「……別に羨ましくなんかないんだから」

「どうした遠坂？」

「衛宮君には関係ないわよ」

追記。聖杯戦争が何だかわからない士郎を教会に連れて行っている。これが現状だ。

心の贅肉であることは重々理解しているが、一方的というのはやはりフェアではないだろう。という結論から、仕方なく凜は士郎を連れて歩いているのだが、そこで漸く現在の問題についての考えを始めることにした。

『アーチャー』

『なんだ？』

隣で実体化したままのアーチャーと（召喚してから今まで霊体になっただけ）念話を繋ぐ。

隣を歩く彼の背後、凜はまるで殺気を隠そうとしない黄色いカットパを着込んだセイバーを、チラリと振り返る。

『あなた、セイバーに随分嫌われてるわよね』

『無理もあるまい。ああいう類いは穢れを逃さぬ。まるで僅かな埃も気にする喧しい小姑のようにな』

『それ、絶対にセイバーには言わないでよ。今更ドンパチやる気にはなれないんだから』

『無論。マスターの望むがままに……それに』

『それに？』

文は背後のセイバーではなく、そのセイバーにさりげなく守られていることすらわかっていない士郎を見た。

「？」

視線の意味を量りかねて、士郎はアーチャーと視線を交わしながら首を傾げた。敵意などまるで感じない眼差し。

はたして、感じないのは敵意だけなのか。

アーチャーは僅かに笑むと、再び前に視線を戻した。

『ワインだな』

『はっ?』

『寝かせるのさ。そう、今はな』

意味深なアーチャーの言葉に、やはり凜は首を傾げる他なかった。

【プロローグ・2】

凜は士郎への道案内は言峰教会に至る坂までと決めており、その坂には時間も経たずすぐに到着した。

「それじゃ衛宮君。これでお別れね」

本来なら話を全て聞き終え、改めて彼がマスターとして戦いを続けるか否かまでついてやりたかったが、何せ行くのは教会だ。アーチャーが問題ないとは言っても、純正の吸血鬼が教会に足を運んでいい気がするわけあるまい。

故にここでお別れ。

「ありがとう。遠坂」

「……あなた、このまま戦うなら敵になる相手に、感謝なんかするんじゃないわよ」

「だったら遠坂こそ。敵になるかもしれない俺に塩を送るような真似をしてるじゃないか」

「フェアじゃないもの。当然でしょ？」

「なら尚更ありがとうだ。遠坂、俺は出来たらお前と戦いたくない

な」

「馬鹿ね……全く」

笑う士郎につられるように、凜も静かに微笑した。

士郎は再びありがとと呟くと、教会へ続く坂を歩きだした。真っ直ぐに進むひた向きの背中を見送る。

と、何故かセイバーは士郎が歩きだしたというのに、その場に立ち止まっていた。「何かしら？」余裕を持ってセイバーに向き合う凜。堂々と、それこそ今ここで戦いになっても構わぬといった風でだ。

だがセイバーは先程までの殺気をまるで感じさせず、小さく頭を下げた。

「助かりました」

「……あなたも衛宮君と同じ口？」

「どうでしょう？　ただ、手助けには感謝を、時が流れどこればかりは常識だ」

「叶わないな。でも次に会ったら敵同士よ」

ニヤリと凜が不敵に笑む。セイバーはその挑戦的な笑みの背後、それと同種の笑みを称えたアーチャーを見据え、

「是非もない。その首、我が剣の礎としましょう」

剣の主に対応しい力強い言葉を残し、己の主の背中を追って足を進めた。

その背中が坂の奥に消えていく。凜はただ静かに敵となりえる二人の主従の背中が見えなくなるまで見送り、

「おっかないわね。アーチャー、どうやらあなた、嫌われてはいるけどすっかり気に入られたみたいよ？」

凜は皮肉をこめてアーチャーに言う。是非もなしと応じるアーチャーの目は、闘争の空気にぎらついていた。

「『たぎる』な。だがしかし、その前にもう一仕事あるらしい」

「えっ？」

「なあおい。もうたまらないんだろ？ 獣臭い殺気がここまで届いているんだ、我慢するな」

アーチャーはコートを翻し、背中から伝わる殺気を見つめた。不死の一族に、夜の隠蔽は通じない。例え魔術による隠れ蓑があるうと、アーチャーの瞳は、財布の中の小銭を探すよりも容易くそれらを看破する。

「……つたく、なんて災難」

ゆらりと姿を現した敵の姿に、凜は思わず悪態をついた。

そこにいたのは死だった。あるいは山か、あるいは鋼か。ともかく剥き出しの脅威がいた。一瞬の内に理解する、全く、なんて怪物か。

その横には、浮き世離れた美しさをもった幼き少女が一人。あからさまにアーチャーを敵意を送っていた。

ランサー以降、出会う者から毎回敵視されるとは運がない。まあ

仮にアーチャーが敵だったならば、敵意以外の何かを感じられるかと聞かれれば、凜としても何とも言えないが。

ともかく、臨戦は既に入った。後は開戦を待つばかりだが、目の前の敵は、強敵だったランサーと比して尚強敵と言わざるをえないだろう。

勝てる気がまるでしない。なのに、負ける気もしないのは何の期待からか。

「こんばんは。お嬢さん」

アーチャーは敵意に愉悦を感じ、恭しく礼をしてみせた。堂に入ったその礼は、社交の場でも充分以上に通用するはずだが、その人を小馬鹿にしたような態度は、どうやら社交の場が似合う少女にはまるで通用しない。むしろ、余計な怒りを買っていた。

「下品なサーヴァントね遠坂凜。当代の遠坂はこんな気持ち悪いのを使役しているんだ」

「あら、醜さで言うならあなたのそれ……頭が下品になつてんじゃないの？ て言うか、そつちだけ一方的に私のこと知ってるなんて不愉快だわ。まっ、何となく見当はついてるけど」

少女の言葉に、大胆不敵に返す凜。目の前の敵は巨大で、先程化け物らしい力を見せつけたアーチャーですら敵うか怪しい。でもまあ、あれだ。

「自己紹介は無しかしら？ だったらほら、さっさとかかって来なさいよ」

「……言っじゃない。その言葉、後悔してもしらないんだから！

「やっちゃえバーサーカー！」

返答は殺意の咆哮だった。闇に浮かぶ銀色の少女の妖精のように可憐な声を合図に、隣に佇んでいた死が進行を開始する。

凜が即座に後退し、アーチャーがその代わりとばかりに前に出た。近づかれるだけで肌を焼かれる錯覚、良し、とアーチャーは白銀の拳銃を構える。

銃声、銃声、銃声、銃声。化け物拳銃の四連射。一発当たれば人体など『ひき肉』にする威力は、バーサーカーと呼ばれた灰色の巨人の肌に傷一つつけることすら叶わない。

「
ツツツ！」

弾丸では僅かにすら押し留めることが出来なかった獣の如くバーサーカーが吠えた。その手に持つ岩を加工しただけの巨剣を、アーチャーを射程に捉えた刹那真横に振るい、アーチャーを真つ二つに引きちぎる。

上体と下半身が泣き別れをする。コマのように回りながら暗い闇に鮮血が注ぐ景色は、ああ、一種の芸術のようである。

「アハッ！ 上出来よバーサーカー！」

少女が巨人の産み出した刹那で崩れるオブジェクトに喜色を浮かべた。ほとばしるは流血の大洪水、内臓を撒き散らしながら回る赤は、少しの飛行をした直後、コンクリートの壁にベチャリと叩きつけられた。

静寂。アスファルトを伝う血が凜の足に辿り着くと、体をなくした下半身が力なく地べたに屈した。

「他愛もないわね。何かしら自信があったのかもしれないけど所詮

は低レベルのサーヴァント。そんなのが大英雄ヘラクレスに勝てるわけないわ」

少女は楽しげに、愉しげに声を張り上げる。

「そういえば自己紹介だったわよね凜？ 私はアインツベルン、イリヤスフィール・アインツベルン。こんばんは、そしてさようなら凜」

それは劇の熱に浮かれた観客のように。

それは劇を舞う可憐な妖精のように。

ただただ己の勝利を謳う姿は。

「ああ本当に。さようならイリヤスフィール」

迫り来る悪夢を意識しないようにしているだけの、哀れな少女でしかなかった。

イリヤの笑顔が凍る。凄惨な処刑現場と化していた大地にて沈黙していたアーチャーが声をあげた。

まだ生きていたのか。困惑するイリヤを他所に、アーチャーの凜への要求をただ一つ。

「命令 オーダー を。我が主」

もうわかってはいるはずだ。アーチャーは欲している。

マスター、凜による号令を。

「我が下僕アーチャーに命じる」

凜の体から魔力が失われていく。アーチャーを束縛する鎖をほど

くために、凜の体が蹂躪される。

だがその痛みに耐える。貪ればいい、食い散らかせばいい。
故に勝てと。凜の命令はただ一つ。

「拘束制御術式、第三号のみ限定解放！ やりなさいアーチャー！」

「了解」

クチャリと、肉と血が混ぜ合わされる音が鳴る。現実にはあり得ぬ異常を持つて、赤き鮮血は黒を彩り、再びアーチャーという個体を整形していく。

時間を巻き戻したかのような光景に、イリヤはただ言葉を失った。死んだはずが生きている。いや、生きているのに死んでいるのか。

一つ、言えることがあるとすれば

「化け物……！」

幼い顔を怒りに歪め、イリヤは吐き捨てるようにそうアーチャーを蔑んだ。

「そうだ、そうだともお嬢さん。今あなたの前に佇むのはそういう化け物だ。そうなった化け物だ。それで、お嬢さんはどうするかな？」

アーチャーは一呼吸置くと、犬歯を剥き出し問いかける。

選択を。お前は犬か、人間か。

応じたのは、鋼の巨人だった。

「
　　ッッッ！」

巨人の剣が空を斬る。いや、砕く。アスファルトを容易に破砕した剣は、その爆心地にいたアーチャーをも吹き飛ばす。

しかし今宵は闇が時。着弾した剣の上にアーチャーは再び構築を果たし、黒色の拳銃、ジャッカルをバーサーカーの眉間に向けた。連続するマズルフラッシュ。およそ人類の編み出した拳銃では最大級の威力がバーサーカーの顔面で破裂をなす。

「やった!？」

凜が必殺の予感に拳を作る。着弾と同時に出了た煙からバーサーカーの顔は見えないが、脳裏に浮かぶジャッカルはDランクの宝具。Dランクとはいえ、宝具が顔面に直撃、しかも連続でだ、流石に無傷ではいられまい。

だが化け物よ覚悟せよ。其の前にいるは、数多の化け物を駆逐した大英雄なのだから。

【プロローグ・3】

「 ツツツ！」

煙を吹き散らす悪夢の絶叫。晴れた煙からは、やはりかすり傷一つないバーサーカーの顔。

三度、バーサーカーはアーチャーの乗ったままの剣を持ち上げ、空中で切り捨てた。

水の入った袋が破裂したかのような音とともに、アーチャーの体が消滅を果たすが、やはり三度、拘束制御術式を解かれたアーチャーは凜の隣に顕現をする。

「千日手だな」

「千日手だな、じゃないわよ。第二号、解放行くわよ」

凜の体からさらに勢いよく魔力が失われる。第二号解放を維持するだけで、この大食い。

「どんだけ燃費が悪いつてのよ」

悪態をつけるだけまだ余裕はある。しかしそれもすぐになくなるのは明白だ。

拘束制御術式 クロムウェル とは、アーチャー アーカード
という宝具を封印している宝具のことだ。第零から第三号まである

この封印は、アーチャーの無限に等しい命のストックを使用するため、馬鹿みたいに魔力を消費する。数万、あるいは数百万におよぶ命だ。それを解放し続けるのは、アーチャーの蘇生にストックを消費するだけでも魔力を使う。

ましてや第二からは使い魔の展開も追加され、第一は使い魔との物理的な融合だ。例え凜でも、令呪のバックアップ無しには、零号はまず使うことは出来ないだろう。

そんなバーサーカーよりもタチが悪い魔力食いのアーチャーを従える凜の事情だが、当然敵は知ったことないだろう。

「だから、負けるなんて許さないわよ？」

「当然だマスター。下僕は下僕らしく、淡々と命令をこなしてみせよう」

影が生える。月明かりに伸びたアーチャーの影から無数の獣が現れる。

溢れでる幻想は、全てが全て血肉を欲する化生の類い。
相対するは鋼の守護神。妖精を守る不落の城壁。

「開演だ。楽しく踊ろう狂戦士」

月光は遠く。肉の宴は終わらない。

喜べ少年。君の願いはようやく叶う。

そう言った言葉を最後に、教会の扉は静かに閉じられた。

「……俺の、願い」

実感のないようどこか確信の持てる言葉を、士郎は教会から離れながら、ゆつくりと反芻した。

願い、それは間違いなく正義の味方になろうとする衛宮士郎の願いで、それが叶うことはつまり、この世には許容されない悪が現れるという

「シロウ」

「……っと。なんだセイバー？」

物思いにふける士郎は、セイバーの声に慌てて返答した。セイバーの表情は家を出てからここまで、剣のように固い。

「先程の神父、言峰の話しはあまり深く考えないほうがいい。あれは、人を惑わします」

「そう、だな。ああ、そうだ」

どうやら、いらぬ心配をさせてしまったらしいと感じた士郎は、快活に笑うことでセイバーに応じた。

だがセイバーは一つうなずくだけで、変わらずその表情は陰しく、

「さっきから仏頂面でどうしたんだ？」

「いや……」

たまらず声をかけた士郎に、思案顔でセイバーはどう答えるか一瞬躊躇う。しかし、これに関しては話したほうがいいだろうと、セイバーは己が胸中を吐露することに決めた。

「アーチャーの事です」

「アーチャー？ ああ、あの胡散臭い奴か」

士郎は脳裏に浮かんだアーチャーの印象をそのままに返す。「胡散臭い、か。わかりやすいですね」セイバーはそんな士郎の捉え方に、微かに笑うと、「アーチャーは危険です」改めて言った。

「危険……そりゃサーヴァントなんだから危険なんだろうけど」

「あなたには危機意識があまりないのですね……」

呆れたと言わんばかりにセイバーは盛大に肩を竦めてみせた。

「シロウ、あのアーチャーはあまりにも危険だ。直接的な戦闘能力ならば、おそらく私よりも遥かに劣るでしょう。しかし、彼の危険はそこではない」

「よくわかるな」

「勘です」

「勘か」

「しかし私はこれまでこの勘に裏切られたことはない」

勘という曖昧に頼るセイバーを疑うように見た士郎だが、次いででたセイバーの二の句の力強さに言葉を失った。

「ですからシロウ。誓って戦いに割り込もうなど考えぬようお願いします」

「わかってる。さっきのランサーとの戦いを見たからな、あんなのに介入しようとするほど馬鹿じゃないさ」

「ならばいいのですが」言葉と裏腹に、セイバーはまだ不安を募らせていた。

「それよりも今は早く帰ろう。流石に今日は色々ありすぎた。本当は今すぐにでも動いたほうがいいのかもしれないけど」

「いえ、その意見には私も賛成です。先程戦うと誓っていたきましたが、マスターは偶然この戦争に入ることになった身です。今は体を休め、考えをまとめることが、私達の最善です」

例え未熟なマスターとはいえ、自身を案じるセイバーの優しさに、士郎は一言「ありがとう」と答えた。

そして再び誓う。私達と言ったくれたその優しさに、私達と言ったくれる信頼に応えるために、セイバーに相応しいマスターたろうと決意を新たにす。

瞬間、背筋を悪寒が通り抜けた。

「マスター！」

声を張り上げ、セイバーが士郎を庇うように前に出た。その手に

は既に顕現した見えない剣を構えている。

「何が、起きてるんだ？」

悪寒は坂を下った 共同墓地からする。未だ体を走る悪寒は拭えず、だが頭は熱に浮かされたようにフワフワとしていた。それでもわかることはある。

「サーヴァント……！」

士郎の考えを代弁するようにセイバーが言った。そして、そこから組み立てられるここからの行動は。

逃げるか。戦うかだ。

「落ち着け……！」

頭の二択を踏み砕く。破碎した思考は改めて構築をし、第三の選択を編み出す。

「……とりあえず様子を見に行こう。いいか？ セイバー」

「望むままに。ですがマスター」

「ここで待ってろって言うんだろ？」

「はい。暫く待っててください」

セイバーは返答と同時にその場から飛び出した。

「頼んだぞ、セイバー」

令呪の宿った手を強く握り込む。何も出来ない自分が、士郎にはとても齒痒かった。

そしてセイバーは見た。夜に君臨する化け物と、夜を駆逐する暴虐の終わりになき闘争を。

「
ツツツ！」

「そうだ！ 突け！ 斬れ！ 砕け！ 私は『ここ』だ！ 『ここ』にいるぞ！」

死者の眠る墓が旋風に打たれ、儚く砕けていく。
その墓に眠っていた骸が起きたかのように、影から獣が込み上げる。

それは神話の再現に他ならなかった。無限にも見える群にただ己の体のみでぶつかる戦いの交響曲。

バーサーカーの剣は、既に十以上アーチャーを絶殺せしめた。だがアーチャーは十を超えて未だ健在、底なでないかのように、ひたすら笑い、ひたすらに襲いかかる。

セイバーはバーサーカーの圧倒的な力に強敵の予感を抱く。だがやはり、バーサーカーの力を補って尚アーチャーの規格外を認めざるをえなかった。

不死というわけではない。現にアーチャーはバーサーカーの剣を

受ける度に間違いなく死んでいる。

しかしアーチャーは蘇る。何度裂こうが砕こうが潰そうが、何度も何度も嘲笑しながら蘇る。

「……ッ！」

齒を食いしばり、セイバーは飛び出そうとする自身を抑えた。

あれは断じて英雄ではない。ましてや反英雄ですらないだろう。

一心不乱に化け物な化け物。それがあれだ。あれというあり方だ。

おそらく、全ての英雄はあれを嫌悪するだろう。何故ならば、英雄は化け物を倒すから英雄なのだ。

故に英雄は嫌悪する。悪夢のような化け物の存在に。

セイバーは知らず、掴む剣に力をさらに込めるのだった。

「こいつ！」

イリヤが苛立ちのまま叫んだ。滅ぼしても滅ぼしても際限なく襲いかかる異形と化した黒い犬に蝙蝠に百足等々、ありとあらゆる生物の群に、最強を誇るバーサーカーですら、その圧倒的な物量には押し込まれるのは当然の流れ。

どんなに葬ろうが迫るそれらは、いよいよイリヤにすら攻撃を加え始めていた。何とか魔術による防壁によって防いでいるが、もしアーチャーが特攻を仕掛けてきた場合、イリヤには逃れる術はない。

「どうした英雄？ 敵はここだぞ？ ここにいるぞ？ さあ剣を振るえ、足を踏み出せ、拳を固めて食い荒らし、叫びながら潰してみせろ。でないと愛しい愛しいお嬢さんは、化け物の腹の中だ」

アーチャーの挑発に、理性のなきバーサーカーは前進をもって答えた。理性は失われど、狙うべきがアーチャーではなく、その背後にいる凜だと悟るバーサーカー。

自身を圧迫する殺気に、疲労の汗とは別種の汗を凜は流した。だが笑え、常に優雅たれと凜もアーチャーの意図を知り、イリヤに向けてガンドを放つ。さらにアーチャーも二丁の拳銃の照準をイリヤに向けた。吐き出される銀の弾丸と、呪いの弾丸。

バーサーカーの前進が再び後退した。イリヤの魔術では防げない威力を、己の体を持って防ぎきる。

やはり無傷の巨人だが、迫る闇はゆつくりと、しかし確実に数を増して妖精と巨人の主従を包囲しだし、

「バーサー……きゃっ!？」

そして遂に、鋼の防壁はおろか、少女が作りだした最後の壁すら、化け物は突き破る。

犬により開いた僅かな隙間。そこから入り込む百足の群。イリヤは一瞬焦りを見せたが、たちまち構成させた火の魔術で百足を焼却していく。

その一瞬。勝負所を確信した凜が新たに魔力を放出した。

「アーチャー！ 拘束制御術式、第一号、限定解放！」

燃える闇が輪郭を失っていく。そして同様に、アーチャーの姿も炙られた飴細工のように影に溶けた。

「
　　ッッッ！」

勝機を確信し、バーサーカーが凜へと風よりも速く迫る。
だがその突撃は、凜の目の前に現れた巨大な犬に阻まれた。
しかしそこで止まる大英雄ではない。剣の一振りでもバーサーカー
は容易く犬を切り裂き、その先にいる凜すらも切り払わんとし、

「残念。一步遅かったわね」

剣の間合いに凜を捉える一歩手前で、バーサーカーの前進は停止
してしまった。

何故停止をしてしまったのか。答えは至って簡単だ。

「バーサーカー……」

巨人の背後、泣きそうな声を出して、イリヤはその背中を見た。
幼く、か弱い首には、白い手袋をつけた手が添えられている。そ
の手の持ち主、アーチャーは「チェックメイトだ人間」と、敗北者
のように弱々しく勝利を謳った。

未だ凜の周りにはアーチャーの影がひしめき、主を失ったバーサ
ーカーの突撃を数秒ならば防げる。その間にアーチャーはイリヤを
くびり殺し、悠々と凜の元へ帰還を果たせる。

だから王手。主を人質にとられたバーサーカーは動けず、しかも
凜を殺して相討ちに持ち込むことも叶わない。

アーチャーは言う。

「残念だ人間。理はいつも残酷だ。化け物は人間に滅ぼされる。だ
がな、努々忘れるな」

人間を殺すのも、化け物なのだという事実を。

アーチャーの犬歯が露になる。絶対の死の予感にイリヤは目を閉じる。

「
ツツツ！」

バーサーカーは、無駄とわかりつつ主の元へ駆け出した。
だが遅い、遅すぎる。バーサーカーがどんなに速く駆け寄ろうとも、アーチャーの牙は無情に少女の首筋を違わず

夜空に舞う赤い赤い雫は、先の見えない未来を予測するかのよう
に、ただ不規則に飛び散った。

【プロローグ・4】

選択をしろ。右か左か、それだけでもいい。選択し続けることだけが、誇りある生を紡ぐのだから。

教会へ続く坂の頂点。静寂のみのその場に、士郎は今にもセイバーの元へ駆け出したい自分を律するように、同じ場所をグルグルと歩いていた。

セイバーが偵察に出てからもう何分が過ぎただろう。一分、二分、いや、一時間どころか体感では一年か、待つばかりの焦りが、士郎の体内時間を狂わしていた。

既に何周目に入ったか、その場でグルグル歩き回っていた士郎の令呪が、セイバーがすぐ側に来ていることを伝えてきた。

同時に、上空から軽やかに士郎の前にセイバーが着地をする。

「セイバー！？」

「遅れましたシロウ。申し訳ない」

「いや、それはいいんだ。それより怪我はないか？」

見た感じ、美しい甲冑と凛々しき顔には目立った傷はない。「安

心を。騎士としては無様なことですが、斥候だけに勤めましたので心配する士郎を安心させるため、セイバーは穏やかに笑んでみせた。現に、セイバーの言葉にまるで嘘はない。

本来ならこのようなやり方は本意ではないが、これもまたなし崩しに聖杯戦争へ挑むことになった士郎を思っただけの行いだ。

そして、それ故に。ここで選択を迫らなければならない。

「マスター……今、死者の眠る土地は戦地となっています」

だからセイバーは士郎のことを、万感を込めてマスターと呼ぶ。その意図するところは、未だ戦いに慣れてはいない士郎にもわかる。

「……ああ、それで？」

「一組は、おそらくバーサーカーであろうサーヴァントを操るマスター。そしてもう一組は……」

「遠坂、なんだな」

「はい」

「なら行こう。遠坂には借りがあるからな」

躊躇いはまるでなかった。士郎は行こうと言う。ならば自身は振るわれる剣にすぎないセイバーは、ただ静かに従うまでだ。

「では、マスターはここで」

「いや、俺も行く」

「なっ……」

士郎の言葉に、セイバーは一瞬返す声を無くしてしまった。だがすぐに怒りを体から発すると、「何を馬鹿な。行ったところでシロウには何もすることはない」と、あえて現実を分らせるために士郎を使えないと断じた。

確かに、その答えは事実そうなのだろう。衛宮士郎には何も出来ない。行ったところでセイバーの荷物にしかないのは明白だ。だが、だがだ。遠坂の顔を思い浮かべる。敵だと言いつつ、手を差し伸べてくれたあの少女。いや、違う。それだけならば、セイバーだけを行かせればいいはずだ。

ならば何故。答えはその隣。

遠坂の隣にいた、あの赤い赤い、闇より赤いあの男が

「行かないといけないんだ」

遠くを見据えながら、士郎は静かに呟いた。

セイバーはその眼差しに、最早何を言っても聞かぬと見たか、ただ一言、

「絶対に、戦いに割り込まないでくださいね」

そう、先程と同じ言葉を再び口にしていた。

「こいつ！」

イリヤが苛立ちのまま叫んだ。滅ぼしても滅ぼしても際限なく襲いかかる異形と化した黒い犬に蝙蝠に百足等々、ありとあらゆる生物の群に、最強を誇るバーサーカーですら、その圧倒的な物量には押し込まれるのは当然の流れ。

どんなに葬ろうが迫るそれらは、いよいよイリヤにすら攻撃を加え始めていた。何とか魔術による防壁によって防いでいるが、それもいつまで持つかはわからない。

「どうした英雄？ 敵はここだぞ？ ここにいるぞ？ さあ剣を振るえ、足を踏み出せ、拳を固めて食い荒らし、叫びながら潰してみせろ。でないと愛しい愛しいお嬢さんは、化け物の腹の中だ」

アーチャーの挑発に、理性のなきバーサーカーは前進をもって答えた。理性は失われど、狙うべきがアーチャーではなく、その背後にいる凜だと悟るバーサーカー。

自身を圧迫する殺気に、疲労の汗とは別種の汗を凜は流した。だが笑え、常に優雅たれと凜もアーチャーの意図を知り、イリヤに向けてガンドを放つ。さらにアーチャーも二丁の拳銃の照準をイリヤに向けた。吐き出される銀の弾丸と、呪いの弾丸。

バーサーカーの前進が再び後退した。イリヤの魔術では防げない威力を、己の体を持って防ぎきる。

「まだまだあ！」

凜はさらに取り出した宝石を投げつけた。血のように赤い石が、凜の魔術の願いを受け取り、簡易的な手榴弾となってイリヤとバーサーカーを巻き込み破裂する。

ダメージはないという確信はある。適当な宝石では、ジャツカル程の威力も神秘もありはしないのだ。

だが凜の狙いは別にある。イリヤを守るために立ち往生するバーサーカーの周りを、アーチャーの闇が取り囲んだ。

「行け」

巨大化した黒犬が、イリヤはおるかバーサーカーの巨体も飲み込んで口を開く。

回避などはせず、当然バーサーカーは一振りにて犬を葬った。鼻を基点に、滝のようにおびただしい流血をしながら、犬が二つに避けていく。

ぐちゃりと地面に犬が堕ちた。イリヤの障壁を濡らす野犬の血。

あまりにも不潔な光景に、嫌悪に歪むイリヤの顔。その目の前で、今度は死した犬の骸から、新たな使い魔の大群が溢れた。

「離れなさい！」

風の魔術とバーサーカーの剣風が犬を排除する。だが終わらない、終わるはずがない。

銃声が鳴り響く。難航不落のバーサーカーが刹那の隙を狙い、アーチャーがイリヤに銀の鉛を届かせる。

「キヤア！？」

白銀の一撃はイリヤに届くことはなかったが、障壁を削るには充分すぎる威力を誇る。

開いた僅かな隙間。そこから入り込むは百足の群。イリヤは一瞬焦りを見せたが、たちまち構成させた火の魔術で百足を焼却していく。

その一瞬。勝負所を確信した凜が新たに魔力を放出した。

「アーチャー！ 拘束制御術式、第一号、限定解放！」

燃える闇が輪郭を失っていく。そして同様に、アーチャーの姿も炙られた飴細工のように影に溶けた。

「
　　ツツツ！」

勝機を確信し、バーサーカーが凜へと風よりも速く迫る。

だがその突撃は、凜の目の前に現れた巨大な犬に阻まれた。

しかしそこで止まる大英雄ではない。剣の一振りですべては容易く犬を切り裂き、その先にいる凜すらも切り払わんとし、

「残念。一步遅かったわね」

剣の間合いに凜を捉える一歩手前で、バーサーカーの前進は停止してしまっただけ。

何故停止をしてしまったのか。答えは至って簡単だ。

「バーサーカー……」

巨人の背後、泣きそうな声を出して、イリヤはその背中を見た。

幼く、か弱い首には、白い手袋をつけた手が添えられている。その手の持ち主、幾つもの眼を闇より現したアーチャーは「チェックメイトだ人間」と、敗北者のように弱々しく勝利を謳った。

未だ凜の周りにはアーチャーの影がひしめき、主を失ったバーサーカーの突撃を数秒ならば防げる。その間にアーチャーはイリヤをくびり殺し、悠々と凜の元へ帰還を果たせる。

だから王手。主を人質にとられたバーサーカーは動けず、しかも

凜を殺して相討ちに持ち込むことも叶わない。

「だがどうだ？　ここで諦めるか？」

しかし勝利者たるアーチャーは、この限りなく勝率が零に近い状況で尚立ち向かってこいと言う。

だがイリヤは首を圧迫され話すこともままならず、バーサーカーは主の命を握られたために動かない。

そこで悟ったのか、悲しげに、それでもある種の満足感を胸に秘めてアーチャーは言う。

「残念だ人間。あまりにも残酷だよ人間。お前達は届かなかった、ついぞ今宵の私の心臓に一步届かなかった。理はいつも残酷だ。化け物は人間に滅ぼされる。故にお前達は穿つ権利を持っていた。私の夢、一睡の夢を終わらせることが出来た……だがな」

だからこそ努々忘れるな。化け物を殺すのが人間であるならば

「人間が化け物に殺されるという理も、また必然なのだ」

アーチャーの犬歯が露になった。絶対の死の予感にイリヤは目を閉じる。

「
　　ッッッ！」

バーサーカーは、無駄とわかりつつ主の元へ駆け出した。

だが遅い、遅すぎる。バーサーカーがどんなに速く駆け寄ろうとも、アーチャーの牙は少女の首筋を違わず

夜空に舞う赤い赤い雫は、先の見えない未来を予測するかのよう
に、ただ不規則に飛び散った。

【プロローグ・5】

許容出来るわけがない。

視線が合ったのは、勘違いだったのかもしれない。今にも涙を泣きそうな瞳が、ただ助けてと訴えていたのも都合のいい妄想だろう。だがそう感じてしまった。認めてしまった。だから助けたいと、願ったから。

「セイバアアアア！」

細かい命令など必要なかった。戦場に到着した士郎は、巨人が動くよりも、銀の少女が目伏せるよりも早く令呪を励起させ、その命令のままにセイバーは瞬間移動もかくやという速度で、少女を掴んでいた化け物を十七の肉塊に寸断した。

「おおおおお！」

同時に駆け出した士郎が力なく崩れ落ちようとした少女をその腕に抱き締めた。

驚愕は誰のものか。期せずとも主を救われたバーサーカーか、予想外の乱入者に目を見開く凜か。いや、そのどちらでもない。

「マスター！？ 来てはいけない！」

驚愕はセイバーのものだ。彼女の直感が、少女、イリヤを救出した士郎の危機を予感する。

先程の戦いを見ていたセイバーにはわかる。あれは、あれはまだ終わらない。

「クツ……ハツハ……」

ぞるぞると耳によくない音を鳴らしながら、士郎とセイバーの目の前で、寸断された肉が結合し、闇色のまま形のない体を揺らす。セイバーが刃を構え直し息を飲む。遠目と間近ではまるで違うプレッシャー。直感は、士郎を抱えたままでは敗北すると告げていた。

「ハハハツ……ハツハツハツハツ！ これだ！ これだからやめられない！ イリヤスフィール！ イリヤスフィール・アインツベルン！ 貴様は永らえたぞ。諦めが心を塗り潰す直前で、貴様は万に一つを己が手にしたのだ！」

化け物が勝利を逃したというのに喜悦を露にする。その内心は如何程のものなのか。

人間の持つ可能性を。人間という力を。人間が繋いでいく絆を。孤独な化け物にはないその真実が、アーチャーには心地よい。

だが、しかし、だ。

「それでもお前は敗北したのだ」

「　　ツツツ！」

バーサーカーが一足にいれた凜へと踊りかかる。再びイリヤが捕まえられる前に倒すには、ここを好機とみたのか、後を考えない捨

て身の一撃は、絡み付く闇に体の動きを鈍くしながらも、凜をその射程へと収めた。本能が一先ずの主の安全をセイバーに委ねてもいいと確信したからだ。

そして、それがバーサーカーの命を失わせる結果となる。

「駄目だ。それでは駄目だ。そんなんじや私の心臓には届かない」
マスター

まとわりつく闇が、バーサーカーの動きを遅く鈍らせる。その間に凜は静かに後ろへ下がった。

決定的な隙、絡んだ闇がまるで蜘蛛のように複数の腕となり、バーサーカーを包んだ。

「捕まえた」

蜘蛛の巣に捕まった虫のようにバーサーカーはもがく。卓越した力は、十秒もせずに拘束をほどこだろう。

だが、

「私はお前を捕まえた」

バーサーカーの首筋にアーチャーの顔が現れる。再び剥き出しになる牙、アーチャー、いや『アーカードという宝具』がその首筋に牙を突き立てた。

「これは……」

その間にも襲いかかる使い魔を落としながら、セイバーは確かに見た。鋼の肌に牙を食い込ませ、血を貪る化け物を見た。

「
ッッッ！」

その咆哮は、死に抗う絶叫に聞こえた。湯水の如く血を噴き出して、バーサーカーが暴れ狂う。

死を前にした抗いは、アーチャーの拘束を無理矢理にほどき、自由になった手でアーチャーの顔を掴み、引き剥がした。

そして全てに幕が降りる。バーサーカーが出来たのはそこまでで、アーチャーはそこまでで終わったバーサーカーからゆっくりと離れた。

「見事だった人間。実にお美事だったよ人間」

「あつ……」

士郎に抱かれたイリヤが目を覚ます。僅かな微睡みから覚醒した少女は、その直後に現実を直視した。

「バー、サー……カー？」

崩れ落ちる巨人。少女を守るただけに戦った狂戦士は遂に、戦いきった命を、化け物の胃袋に取り込まれ、

「……ッ。戻りなさい！ バーサーカー！」

まだ大丈夫だとイリヤは理解した。急いで戻せば、回復をはたす。バーサーカー、ヘラクレスが宝具、十二の試練は、まだ二つしか破られていないのだ。

だが同時にイリヤは歯噛みした。バーサーカーは暫く動けない。二つの命を一気に奪われた。瞬く間になくなった命を継ぎ足すには、今暫くの時間が必要となる。

でもあいつは構わないだろう。目の前の化け物は、動かないバー

サーカーには興味はない。狙いは私だ、助かった私

「って、あれ？」

そこでハタと気付く。場違いなほどにきょとんとして、自分の顔をペタペタ触り、何故自分が生きてるのか今更気付く。

「私、生きてる？」

生きてる。生きている事実。あの瞬間、首筋に感じた殺気が肌に触れるまで、イリヤはバーサーカーを信じた。でも生温い血の暖かさを感じて、駄目だったのかと意識を手放したのだが。

「気付いたか？」

「えっ？ お兄、ちゃん？」

どうして、自分は彼に抱き締められているのだろう。ずっとずっと会えるのを待っていた彼に包まれているのだろう。

状況を忘れ呆けるイリヤ。だが状況はまるで待つてはくれない。

「マスター！」

セイバーが叫んだ。バーサーカーを倒し、狙いをこちらにだけ定めたアーチャーの使い魔の攻撃が密度を増したからだ。

「速く後退を！ このままでは……！」

「でもそれじゃセイバーが！」

「あなたがいると背中を気にしてしまい戦えない！」

「ッ……」

辛辣なセイバーの言葉に返す答えのない士郎は息を飲んだ。そう
だ、セイバーは絶対に戦いに割り込むと言った。その約束を破つ
たから、こんなことになっている。

約束を破り、しかも敵方のマスターを助けさせるという真似まで
させて、この期に及んでセイバーの助言を無下にする程、士郎は馬
鹿ではなかった。

でも、

「遠坂！ 俺達に戦う意思はない！ だからアーチャーを止めてく
れ！」

士郎はアーチャーの背後で腕を組む凜にそう訴えた。戦う必要な
んかない、そんな意味がない、と。

だが、返ってきたのは銀の咆哮だった。

「何を言っている小僧」

士郎に迫る弾丸は、セイバーによって切り払われた。

アーチャーが白銀を士郎に向けて、背中 of 凜をその体で隠す。そ
れはつまり、士郎とアーチャーの視線が重なることを意味した。

その眼にあるのは怒りだ。闘争に水をさす愚かへの純粹たる憤怒
だった。

「お前は闘争に入った。己の意思を持って闘争への道を選択したは
ずだ。命をチップに、持てる手札に全てを賭けたのだ。僕は投げら
れて、後はコールを待つのみ。お前の言葉は場違いだ。和平を望む

なら、家に引き込もって愛と平和（ラブ＆amp;ピース）でも歌っている」

アーチャーの言葉が士郎に突き刺さる。剣を向けながら戦う意志がないという愚かを指摘され、言える言葉はない。

しかし士郎は歌う。歌うのだ。

「ああ、俺は戦いに参加したさ。だってこんな小さな子を殺すのが戦いなら　俺は、その戦いと戦わないといけないから」

士郎は胸に抱く小さな体を離すまいと強く抱き締めた。

暖かな体が、まだ少女が生きていることを伝えてくれる。その温もりが、もし士郎が行動をしなかったことで失われたとするなら、

「だから、俺の戦いは、間違いなんかじゃない」

そう強く断言出来るのだ。

「……なら、証明してみせる人間。お前の確信を私に見せてみる！」

アーチャーの体から、あのバーサーカーを一時とはいえ捕らえた無数の腕が再び現れた。さらに、回りには無数の獣が溢れる。

「くっ……！？　マスター！」

「すまないセイバー！　……ごめんな、遠坂」

セイバーは迫る腕を、獣を、勝利を約束された剣で振り払う。その間に、士郎は一目散に逃げ出した。

「ハア！」

セイバーが果敢にも攻め立てる。勿論、バーサーカーの体を貫いた牙に捕らわれないように直感を働かせながらだ。

果たして、無限に等しいアーチャーに、士郎が逃げるまでの防戦を強いられるはめになったセイバーだが、その攻撃は突如終わりを見せた。

「もういいわ、アーチャー」

ここまで一言も話さなかった凜が口を開く。すると、打てば響く鐘のように、使い魔が闇に消え、アーチャーは元のコートを羽織った姿に戻り凜の横に並んだ。

「何故止める？ 敵がいるのだ。やることは一つだろう？」

マスターに言われたためにアーチャーは攻撃を止めたが、再び凜が行けと言えばすぐに飛び出す程に殺気をみなぎらせたままだ。

「黙りなさい。今夜はもう終わりよ。衛宮君もイリヤも逃げた。それが全て、全てなの」

「……」

「それとも、私の言葉が聞けないわけ、アーチャー？」

挑戦的な凜の眼差しに、アーチャーは剥き出しの殺気を収めることで返答を試みせた。

当然、それだけでセイバーが矛を収めるわけがない。警戒しているセイバーを、凜は溜め息混じりに見た。

「あー……まさかこんな直ぐにあなた達と敵対することになるなんてね」

「次に会うときは、その首を獲る、そう言ったはずだが？」

「……そういえばそうだったわね。でも止めよ。今夜はあくまでも様子見、ここであなたとまで戦うとなると、私も覚悟を決めないといけない」

表面上は冷静だが、凜の魔力は、ランサー戦も含めた一時間以上にもおける戦いで、既に半分程消費されていた。

たかが半分と侮るなかれ、普通の魔術師ならば最早枯渇していても可笑しくない量の魔力を凜は消費していた。

だからというわけではないが、もしこのままセイバーと戦えばさらなる魔力の消費と、未だ見てはいないセイバーの宝具により、零号の解放すら余儀なくされるかもしれない。

それはこの冬木を管理する凜からしてみれば、許容出来るものではない。冬木に眠る見知らぬ人々を巻き込む愚行は出来ないし、まだ見ぬサーヴァントがいる中、死力を尽くすメリットが見えない。

「じゃあねセイバー。生きてたらまた会いましょう アーチャー」

「了解。マイマスター」

アーチャーのコートが凜を包むと、そのコートから落書きのような赤い翼が出てきた。

その翼をためかせ、二人の主従が夜に消えていく。セイバーは黒になくなる赤の姿を見送ると、振り返らずに自身のマスターの元へと走り出した。

一晩の夢はここで終わる。化け物は化け物たる力を示し、人間は人間たる覚悟を証明した。

「アーチャー」

「ああ、なんだマスター」

「次に行くわよ」

「勿論。次の闘争が私を呼んでいる」

夜空を駆けるは赤の主従。それに抗いを誓うのは、鉄の心と剣の英霊。諦めを認めぬが故に、次の対峙をただただ望むから。

「一睡、一酔。夜は魑魅魍魎が夢のはざま。さあもつと私を酔わせてみせろ、人間共」

汝、運命の夜を越えたくば、広がり続けるあきらめを、ただひたすらに踏破せよ。

ここに、第五次聖杯戦争の幕が開く。

【プロローグ・5】（後書き）

皆様初めまして、トロと申します。

とりあえず今ここを見ているということは、一通りは拙作を読んでいただけたのでしょうか。楽しめたのなら幸いです。読んでいただきありがとうございます。

なお、ここまで読んでいただいた皆様ならお気づきかもしれませんが、原作で書かれている部分をだいぶ省いており、F a t e原作を知らない方からすれば大変読みにくい内容になっているかと思えます。

これは私が好きな場面だけ書きたいという我が儘から、このような形になってしまった次第です。正直ネタとして即興でプロットを組み立てたので、こうしないと途中からだれてしまうからという何とも自分勝手な理由からだったりします。

なので、ここの描写が欲しい。説明が足りないよ。という部分がありましたら、是非とも感想に添えて言っていただけたらと思います。可能な限り、足りない部分に関しては付け足していきます。

では、また読んでいただけたら幸いです。

【interlude】

ある日、私は連れ去られた場所で犯された。

だが神に慈悲は乞わなかった。絶対に願いはしなかった。

ある日、私は剣を握って戦争を繰り返していた。

神は祈りの果てには降りてくる。戦いという祈り、闘争の果て、生死の狭間、壊し果て、死に果て、惨めに憐れな我らの下に、神は降りてくるのだから。

そしてある日、私は化け物になった。人道を外れ、人外への門を叩いた。泣きたくないから化け物になった。全てを殺し、自分までも殺した果てに、私は化け物に成り果てた。成って果てるために成り果てた。

だから、いつまでも終わりのなき闘争に身を置くのだ。焼けた戦禍の音を聞き、砕けた剣を携えて、割れた鎧に牙を立てる。

その終わりに、朝日は昇るのだ。五百年前に、百年前に、そしてあの日あの時見た朝日が昇るのだ。

それを見る度に思う。ああ、陽の光とはこんなにも

「ん……」

夢を見ていたらいい。おそらくパスから流れたアーチャーの記憶

だろう。それを私は擬似的に追体験をした。

戦いにしか己を見い出せない彼の生涯。化け物に成り果てるしかなかったその歴史。私はどんな失われる彼の、アーチャーの記憶に対して、ただ「まあなんだ。ドンマイ」と軽く感想をつける。そんな風に扱うべきじゃないからこそ、忘れるために、そう感想をするのだ。

そうすればほら、起き上がった私には軽く済ませた感想しか残らない。

「……うー」

寝ぼけ眼をゴシゴシ擦り、私はベッドの横にある椅子で本を読むアーチャーを見た。まるでどっかの貴族みたいに優雅な姿は、どことなく気品を漂わせていて 悔しいが、結構様になっている。

「おはよう……アーチャー……」

「ようやく目覚めたか、リン」

「あによ、まだ6時じゃない」

全く、何がようやく起きたか、よ。不機嫌を露にして、再び読書に戻るアーチャーを他所に、私はベッドから降りると部屋を後にした。

あの戦いの夜から一日が過ぎた。

ランサーとの戦いのときは、あまりにも一方的なやられっぷりにこいつホントに大丈夫か？ なんて思ったりもしたが、いざ蓋を開ければ、そんな評価をした前の自分を直ぐに殴り飛ばしたくなるほど、アーチャーのポテンシャルは計り知れないものだった。

アーチャー。真名をアーカード、またはドラクル、またはヴラド・ツエペシ。彼は死徒や真祖なんかとは違う、血を吸うことに意義を示す、本物の吸血鬼だ。

どうやらつい先日吹き飛んだロンドンが英国の誇る、相互不干渉で時計塔すら手を出すのは止めていた『あの』ヘルシングの鬼札だったらしい。だった、というのは、今のアーチャーは何とも複雑な状況下にいるらしく、本物の（おそらく座にいる）アーチャーは、まだここにはいるがどこにもいないらしい。とのこと。

まあそこところはよくわからないし、知っても意味がないのは、アーチャーと私の共通認識だ。今は私がアーチャーのマスターで、アーチャーは私のサーヴァント。それ以外に知る必要は何処にもない。「私は私だ。今はあなたにだけ仕える忠実な犬にすぎぬ」とはアーチャーの談。実際、せれ以上に必要な意味なんてまるでないだろう。

「ふう……」

自分で淹れた紅茶で一息入れて、やっと覚醒してきた意識をシャーンとさせる。

ともあれ、昨夜をもって私の聖杯戦争は始まった。いや、始まったのはあの日あの瞬間。

闇夜に現れたアーチャーを下僕にせしめた、運命の夜からだろう。

【interlude 『Rin』・1】

この闇を言葉で表すなら、どんな言葉が似合うだろうか。

召喚は完璧に上手くいった。何も問題はなく、家がぶっ壊れるだなんてアホなことなんか起きるはずもなく、ともかく完璧に成功した。

だがこれはなんなのだろう。成功したはずが、召喚陣より現れたのは、無形の闇だった。狭くはない室内を埋め尽くす闇の籠は私の足下も覆い、幾つもの眼で私を観察している。

得体の知れない恐怖が私を襲った。闇に吞まれる中、思い出したのがあの光景だからだ。ロンドンで拾ったあの小石に見せられた光景だ。

頬を伝う汗が、顎から落ちる。それは闇に波紋をつけることもなく吸い込まれ、まるで化け物の胃袋の中にあるような錯覚を覚えた。だが、私の動揺はそこで終わる。再び落ちようとする滴を掬い取ると、大胆不敵に笑ってみせた。

「あら、趣向を凝らしたにしてはセンスがないわね。普通、サーヴァントならサーヴァントらしく、マスターに挨拶するところから始めるもんじゃないのかしら？」

問いかけに、返事は沈黙。いや、僅かに私を認める眼差しが、細くなり、笑んでいるかのように形を変えた。

そのあまりにも私を小馬鹿にした態度に、流石の私もカチンときた。青筋を額に浮かべると、足下の目を思いつきり踏み潰す。

「セクハラよ。見るなら金払えつての」

感触はグニグニしていて不気味だが、あえて踏んだ目を踵で弄くる。グリグリと踵で抉れば、目はゆっくりと瞼を下ろした。

同時、全ての目が瞼を下ろし、続いて召喚陣のあった場所に闇が収束していく。

「ハ、ハハハッ！　どうやらこの程度で逃げ出すような童ではないらしい。いや、そうでなくては私を飼い慣らすマスターとしては程度が知れる」

闇は人形を作ると、パチパチと拍手をしながら、徐々に輪郭を形成していく。

それは赤い赤い男だった。背丈の高い、赤いコートを羽織った男いや、サーヴァント。

まるで存在自体が魔力で作られたかのように、高密度の力を男から感じる。これがサーヴァント、神話の再現をした伝説の存在か。

「……で？　あなたの眼鏡にはかなったのかしら？」

だからこそここで舐められる訳にはいかない。可能な限り余裕綽々といった感じで、私はサーヴァントを見上げた。

未だ笑うサーヴァントは、「ああ」と一言。その場で膝をつき頭を垂れた。

「新たな我が主よ。契約を交わそう。主従の契りを果たそう。私の夢に現れたあなたに、我が夢のはざまを捧げることを、ここに誓おう」

「ええ、よろしくね……えーと」

「アーチャー」

アーチャーか。まあこんな胡散臭い奴がセイバーだったらそれはそれでごめんだったかも。

まあともかく。

「私は遠坂凜。短い間になるだろうけど、よろしくねアーチャー」

「こちらこそリン・トオサカ。我が新たなるマスターよ」

交わされる主従の契り。祝福はない、悪魔とアクマ、魔の契約に祝福などはいらないからだ。

「さて、これからどうするか……」

紅茶を飲み干した私は、対面に座すアーチャーにもカップを渡して二杯目を楽しんでいた。

「紅茶、か」

「あら、吸血鬼は血以外飲まないんだっけ？」

「そうだ、とでも言うのがいいのかもしれないが、折角のマスターからの好意だ。ここは我慢してありがたくいただきます」

「いやならいやって言いなさいよ」

クツとアーチャーの口が裂ける。全くこの化け物は、いつだって人を小馬鹿に……って。

「アーチャー、あなた、血が流れてる」

それはあまりにも日常に溶け込んでいて、私は米粒が顔に付いているのと同じくらいの容易さでアーチャーの額から流れる血を指摘した。

それに対しアーチャーは「ククッ」とさらに笑みを深くすると、白い手袋で自身の赤を救って楽しげにそれを眺めた。

「活きがいいな。死して尚、未だ諦めない、か」

「アーチャー？」

「何、気にするな。『暴れん坊』が暴れているだけだ……直に溶け込む」

「……そう。まあ私に迷惑がかからないなら別にいいわ」

「それよりもマスター。私のこと等どうでもいい。次の話をしようじゃないか」

「そうね。でもその前に……」

私は席を立ち上がると、アーチャーの隣にまで行き、自身の指を噛みきつた。

そこから染みだす赤い雫を、カップの上から落としていく。ピチャピチャと跳ねながらカップに染みていく私の血液。十秒程そうしたら、魔術刻印を働かせ、指の止血をする。

黙ったままのアーチャーはやはり笑ったままだ。私も笑いながら席につくと、私を見るその顔を、真正面から見返した。

「ミルクは充分かしら?」

「ああ存分と。紅茶はミルクなしでは私には少々苦いのでな」

注がれた紅茶をアーチャーが飲みだす。不味いか、不味くないか、それはこの際どうでもいい。

ともかく今は、

「さあ、戦争の話をしましょうか」

次の闘争に向けて、私とアーチャーは静かに準備を始めるだけだ。

【interlude out】

【WHITE WHITE FAIRY GIRL・1】

無様を晒す。とは、屈辱的なことだ。自身の信念に反し、取捨選択を間違ひ、理性を裏切り、本能に否定するのだから。

それが他人への無様ならばまだ救いはあるのかもしれない。しかし、これは自身への無様だった。正義の味方を志す己を裏切る屈辱だった。

だがそうしなければ少女は救われない。剣を預けると言っただけでも助からない。

故に彼は責められない。他人への無様ではないために、罰は己で己にくださないとけない。

歯を噛み砕く勢いで噛み合わせる。ギリリと歯と歯が音を鳴らした。

「お兄ちゃん？」

そんな彼を心配するのは、彼の選択により命を繋ぎ止めた少女だ。

「ハア、ハア……ああ、ハア、大丈夫」

少女の心配が痛い。無様だ、あまりにも無様だ。俺は何をした、何も出来なかった。戦うと言った癖に戦うつもりなんかはまるでなかった。

その無様が悔しいが、今はともかく走り続ける。少女を抱き締め、走り続ける。

彼に今出来る最善だから走るのだ。その間だけは何も考えなくて

もいいという、甘い甘い考えだったとしても。

衛宮士郎にはそれしかない。生存への逃走しか、彼には許されていないのだ。

選択は既になされた。或いはあったのかもしれない、赤い主従との同盟などという奇跡のようで冗談な選択は最早ありえない。

だから走る。走り続ける。選択は常に示され続けているが、どう足掻こうが今士郎に出来るのはそうすることしかないのだから。

【WHITE WHITE FAIRY GIRL・1】

深夜の撤退は成功した。あの化け物を相手に逃げ切ることが出来るか、正直自信があまりなかった士郎ではあったが、何があったにせよ戦わずに済んだというのは、士郎に安堵の念を覚えさせた。

「……なんか随分と懐かしいな」

普通の一家屋にしては広大な実家を見て、小さな溜め息を吐き出す。

「ここ、お兄ちゃんの家なの？」

胸元の少女、イリヤスフィールは士郎の肩から覗く形で彼の家を見た。

耳元を撫るイリヤの吐息をむず痒く思いながらも、「ああ。ここ

が俺の家だ」と答えてみせた。

「ふうん……ここが、かあ」

イリヤは複雑な胸中をどう言葉にすればいいかわからなかった。

イリヤスフィールは、衛宮士郎の養父であ、衛宮切嗣の娘だ。だが前回の聖杯戦争の時に彼に捨てられて（実際は捨てられたわけではないが）アインツベルンにて耐え難い苦難の毎日を過ごしていた。

だからここに来たら切嗣の息子だという士郎を殺すつもりだった自分を差し置いて幸せになった切嗣の幸せの象徴を壊して、彼への復讐を果たそう、それだけを願ってここに来た。

それが今は、復讐の対象者に助けられるという始末だ。複雑になるのも無理はないだろう。

「えと……だ、大丈夫か？ 寒いならすぐにお茶淹れてやるから」

当然ながらイリヤの小さな胸中など察するスキルを士郎が持つてゐるわけもなく、場違いな気づかいをしてしまう。

だが、そんな士郎の不器用な優しさがイリヤにはとても心地よい。士郎の首に手を回すと、クスクスと笑ってその耳に口を寄せた。

「……シロウはもっとレディへの気づかいを習うべきね」

「……ッ！？ み、耳元で話すのは駄目だ！」

「あら？ どうして？」

「どうしてって……そりゃ、くすぐりたいからだよ」

見た目はどう見ても自分より一回りは幼い少女に、言い様にされ

てしまったのが悔しかったのか、ぼそぼそとか細く、どこか拗ねた口調に、イリヤの笑みはより深くなる。

「ふふっ、ごめんなさいお兄ちゃん」

「あ、ああ」

首に回した手を離そうとしないイリヤに生返事を士郎はした。

「つて、今俺の名前を……」

「ん？ あれ、まだ自己紹介してなかったかしら？ 私は」

自己紹介をしようとしたイリヤだったが、それは二人の前に現れた騎士によって遮られた。

「セイバー！」

「怪我はありませんかシロウ」

「バカ！ 俺はどうでもいい！ お前は大丈夫なのか！？」

「……ええ。化け物に遅れをとるとあっては騎士の名に恥じる。とはいえ、逃がしたのは事実、申し訳ないマスター、彼を仕留め損ねた」

「いいんだそんなことは。セイバーが無事で何よりだよ」

「心遣いに感謝を……ところでシロウ」

「なんだ？」

「まずは状況整理を……あなたも構わないな。バーサーカーのマスターよ」

「……いいわ。そうしよう」

イリヤは、セイバーが来たことで蚊帳の外に置かれたのが気に入らず、すっかり不機嫌になっていた。

士郎から離れて、軽やかに着地をすると、セイバーと士郎の正面に立つ。

「改めてこんばんは。イリヤスフィール・アインツベルンよ。よろしくねお二方」

「俺は衛宮士郎だ」

「ええ、よろしくねお兄ちゃん」

花が咲いたように可愛らしく微笑むイリヤ。

そして改めて思う。ああ、恥は晒した、無様は変わらない。でも、だけれど。

「……こちらこそ。よろしくな」

この子を救えた事実が、衛宮士郎には心地好い。

すっかり冷えてしまったお茶を飲みほす。冷めても美味しい衛宮印だが、今回に限れば味もクソもない。士郎とイリヤとセイバーは、衛宮邸にとりあえず入ると、そこで今日の出来事　アーチャーについて話し出した。

改めて聞かされたアーチャーの特異性に、士郎はお茶を飲んで落ち着くことしか出来なかった。

あのランサーを撃退したセイバーをもってして化け物と評すアーチャー。彼の實力は、イリヤのサーヴァントであるバーサーカーすら突破口を見つけられなかったくらいだ。

「やはり、あの異常な程の使い魔に、首を跳ねようが心臓を突こうがまるで死なない耐久力が彼の強みでしょう。あれでは宝具を晒すだけ晒して死なないということもあり得る」

アーチャーの強さをまとめたセイバーの言に、直にそれと接したイリヤも「そうね」と相槌を打った。

「現状はマスターの凜を狙うしかアーチャーを倒す手段はないわ……悔しいけど、私のバーサーカーじゃ負けはしないけど勝てもしない」

バーサーカーが宝具、十二の試練は、Aランクに届かない攻撃は、例えば宝具の一撃ですら受け付けない。事実、バーサーカーは迫り来るアーチャーの使い魔や弾丸に幾度も身を晒したが、ダメージは皆無であった。

唯一バーサーカーを貫いた一撃も、一度受けた攻撃に耐性がつくので、次は食らうこともあるまい。

まあまだ他にAランクに届く宝具があれば別だが、それはおそら

く捕らえることでようやく使えた一撃よりも使用は難しいはずな
で（でなければ使うはすだ）、近づかれないかぎり受けないだろう。
だが再びマスターである自分を狙われれば今度こそ逃れられまい。
悔しいが、バーサーカーではアーチャーという壁を越える前に、守
るべきマスターを奪われてしまう。

「だからシロウ。お願いがあるの」

「えっ？ 俺に？」

いきなり話を振られた士郎が、お茶を入れ直そうとして立ち上が
ったまま呆けた。

アホらしいその姿に、イリヤは「シロウ。ポカンとしてる」と言
って笑い、セイバーも静かに口元を弧に変えた。

「……で、頼みってなんだよ」

士郎はたまらず話を戻した。再び座り込み、背筋を伸ばしイリヤ
に向き直った。

「俺に出来ることなら、なんだってやるさ」

偽りなき言葉は、士郎の胸に蔓延る無力感から出たものだ。話し
合いにすらまともに参加出来ない自分だが、それでも頼みがあるな
ら聞く、そんな覚悟の声。

「シロウ。いいえ、セイバーのマスターにお願いするわ」

「ああ」

ゴクリと息を飲む。はたしてどんな無理難題が出るかわかったものではないが、やれるだけならやってやる。そう、覚悟を決め

そつと、イリヤが右手を士郎の前に差し出した。

「同盟を結びましょう。あのアーチャーを倒す、その共通の目的のために……」

「あつ……」

向けられた手のひらと告げられた言葉。士郎が声を失ったのは、驚きと、そして嬉しさからだ。

「ダメ……？」

何も答えを返さない士郎が拒絶をしたのかと思ったイリヤが目に見えて落ち込む。

「そ、そんなことあるか！」

慌てて士郎はイリヤの手を握り返した。同時に、雪のような暖かい冷たさが士郎の手を包んだ。

それはイリヤの白い肌に似た冷たさで。小さい手のひらは、強く力を込めてしまえば雪のように崩れそうだが、今の士郎には何よりも便りになる、そんな手のひら。

「むしろこつちから願います。よろしくなイリヤ、一緒に頑張ってください」

士郎の裏表のない言葉と鋼のように固く、力強く、暖かい手のひ

らに包まれて、イリヤは心の中で笑った。

なんて素敵な言葉だろうか。なんて優しい手のひらだろうか。ただ復讐を願っていた。それだけを願ってきた。

なのに彼から感じるのは遙か昔、もう忘れたはずの父の温もりで

「うん！ よろしくねお兄ちゃん！」

堪らなくなつて、イリヤは士郎に飛び付いた。構わない、構わない。まだ胸の大部分を憎しみが埋めていても構わない。

胸に宿った小さな灯火。

冬を知らない少女の心に、鋼の熱が染み渡っていった。

【Red Red Blood Demon・1】

剣の山は健在だ。

串刺しにされた自分。串刺しにした大地。串刺しになる空。剣はまわりつき、離れない。刃はいつまでもあり続け、例えるならば、体すらも剣で出来ているかのような感覚。

内臓に至るまで鋼。内臓に至ってこそ鋼。我が身、単に剣ならば、その思考はきつと、プログラミングされたようなものなのだろう。

「……ん」

朝焼けもまだ射さぬ空の頃に、衛宮士郎の瞼は開いた。持ち上げた体は未だに気だるいが、おそらく精神的な類いだろう。昨夜出会った命の取り合いが、思いの外心に負担をかけたらしい。

「ん？」

ふと、右腕が妙に重いのに気付いた。ふやけた頭で、やっぱり昨日の負担かなと思つた士郎は、右腕を持ち上げようとしたが、何故か右腕はまるで動かない。

「んん？」

違和感は最高潮だ。いぶかしみながら、自由の効かない、むしろ圧迫されてるような右腕を見て愕然する。

「……クウ」

「あつ、イリ、ヤ？」

右腕の重さの正体を知り、士郎は右腕にまとわりつくイリヤの名前を呼んだ。

だが夢心地の少女は起きる気配をみせない。

まあ、仕方ないか。士郎は嘆息しながら、まだ起きるには早いで再び眠ろうとして、

「
ツツツ……」

障子の向こうにある影を確かに見た。

「……」

「
ツツツ……」

「……」

「
ツツツ……」

おそらく、おそらくそこにいるはずの巨漢を想像して思う。

あら知ってます奥さん？ あちらのお宅、障子開けたら狂戦士が待っているんでステイ。

「……うん」

よし寝よう。士郎の夜はまだ終わっちゃいないのだから。

【Red Red Blood Demon・1】

絡み付くような気味の悪い感覚。早々に何とかしないと、凛は校門を抜けた直後にそう改めて思った。

『あー嫌だ。校門抜ける度にセクハラされてる気分で嫌になるわ』

『そうか？ この感じ、らしくていいではないか。前にも言ったがナリン、この結界を張ったのは化け物の類いだ。そう、嫌らしく、そして実に愉快で楽しい化け物だ』

『……アーチャー。わかつてるとは思っけど私達の狙いはあくまでマスターとサーヴァントだけよ？ 敵を倒すために邪魔になりえる一般人を巻き込むのは許さないからね』

『そうだな。ではここはアーチャーらしく遠くから狙撃でもしてみせようか？ お前は敵のマスターを見つけるだけでいい。人混みだから大丈夫と油断して窓際に出るような阿呆なら、それで簡単に殺れる』

『だから一般人巻き込むって言うてるつーの。アーチャー、あなたの考え方、私には一生理解出来そうにないわ』

『化け物の思考など、人間のお前が理解出来るわけあるまい』

『そりゃそうね』

念話を続けながら、凜はいつもと変わらぬ動作で学校内に入ると、まずは目につく結界の起点に当たりをつけた。

教室までの道のりで一つ。だがこれだけではないだろうし、そも結界の要というわけでもあるまい。

今、この学園には誰かが敷いた結界がある。効果は結界内にいる人間の生命力を奪うといった極悪なものだ。

地道に妨害をしているので、発動にはまだ至らないだろうが、それもいつまで持つかは樂觀視出来ない。

なのでこんな結界を張ったであろう、この学園にいるはずのマスターを凜は第一目標として考えていた。

『それで、怪しいのに目星はつけたか？』

朝のホームルームが始まった。クラス担任が出席をとる中で、再びアーチャーから念話が入る。

『検討中ね。一人マスターになりそうな子は知ってるけど、あの子に限ってそれはあり得ないから……』

『断言出来るのか？』

『するわ。そうだもの』

『ハッ、それはいい。それもいいだろうさ。さて、私は言われた通り、餌を探すやせ犬のように学舎を探索するでしょう』

『ええ、よろしくアーチャー』

念話が途絶え、凜は現状は何もせずに授業に熱を入れることにした。

そんな凜を、アーチャーは校庭の隅から伺うと、静かに影のほうへと歩を進めた。

「一先ずはそういうことにしよう……いいさ、リン。我が主よ。お前がそう言うならば、私はそれに従うまでだ。語らず、騒がず、つがえた弓矢であり続けよう」

アーチャーは歩を進めた先、学校の校舎裏にある林に踏み込むと、ゆつくりと散策を始めた。落葉を割りながら、枯れた木々の間を巡る。殺風景な風景に、アーチャーは柄にもなく今の境遇について思いを馳せた。

あの日、虚数となり自身を認識出来なくなった日から、まるで時間はたっていない。ならばインテグラもセラスも変わらずに自身の帰還を待っているはずだ。

ならば戻るべきなのか？ と言われれば、答えはノーだ。今の自分は、あくまで聖杯によって型どられた仮初めの身でしかない。偽りの存在では帰還とは言えないだろう。

「……ふん」

くだらない考えた。それよりも今は、この聖杯戦争という魅力的な闘争をどう堪能するかを考えよう。

「そうだな……」

出来るならば、全てのサーヴァントと相對したいが、それは都合

がいいというものだ。何より、昨夜戦ったあの人間達だけでも十二分に楽しめる。

「ククツ……」

昨夜を思い出して、アーチャーは小さく笑い声をあげた。楽しみだ、あいつらと再び戦えるのが、楽しみだ。

と、アーチャーの視界が揺れた。そして額が割れて出血をする。

まだ、まだ暴れるか。補食した最強、主に従順な狂戦士め。

「ハ、ハハッ。そう暴れるなよ。焦るな、怒るな。死にながら死のうとしないなら、私の腹で踊り狂え。戦い、戦い、戦い尽くして、化け物の胃袋を破ってみせろ。まあいずれにせよ、直にまた」

会わせてやると言おうとして、サクリと、震わせるはずの喉から鉄の杭が飛び出した。

「……？」

あまりにも唐突な一撃に、アーチャーは杭に手を添えて疑問符を浮かべた。

一撃、一撃だ。貰った一撃は的確に喉を捉えていて。

「おっ……！？」

アーチャーの足が宙に浮く。疑問に答えを受けるよりも早く、その身は空を舞い、近くの木に叩きつけられた。

一方的な奇襲に、なすすべもなくアーチャーが地に落ちる。未だ突き刺さった杭には鎖が付いており、その鎖の先にいる持ち主は、アーチャーが倒れたのを確認してからゆっくりと姿を現した。

現れたのは、紫色の長い髪の人だ。目はまるで何かを封じているかのように固く眼帯で封じられてはいるものの、そうであっても彼女が醸し出す色気は封じることが叶わない程、あまりにも美しい女性だった。

「油断がすぎましたね。見知らぬサーヴァント、眠る獣すらもう少し警戒はしているでしょうに」

鎖を手繰り、人はその美貌に劣らぬ美しい声で、冷たくアーチャーを侮蔑した。

人は動かなくなったアーチャーの首に突き刺さった杭を鎖を引っ張り抜いた。開いた穴から鮮血がほとばしり、支えを失った首が大地へと落ちた。最早現界は叶わぬだろう。人は見えぬ眼で、消え去るしかないアーチャーを見据えた。

落ちた顔が人の顔を見返す。物言わぬ軀は、ただ恨みを込めて人を見ていた。

「ッ!？」

人の顔に焦りの色が浮かぶ。

見ている。そう、見ているのだ。その事実を認識した瞬間、動かぬ口が動いた。

「確かに……生前の『クセ』が抜けていないらしい。今の私はあくまでもマスターによって生かされる仮初めの身でしかないのだからな」

言いながら、巻き戻しをするかのようにアーチャーの首が元の位置へと再び戻る。

「しかしな『同類』よ。首を落とした程度では私を滅ぼすにはまるで足りない。殺すにはまるで及ばないし、打ち倒すにもまるで届かなければ、滅ぼすにはなっちゃいない」

そして、ふらつくことなく立ち上がり、自身の胸に手を置いた。

「化け物は、ここを挟らぬ限りは死なぬよ」

「……不愉快ですね。あなたみたいなのと一緒にしないでほしい」

「一緒にするな？ 馬鹿を言う。むせかえるくらい血の匂いをばら撒いて一緒にするなだと？」

そこでふと得心したのか、アーチャーは女を指さして嘲るように肩を揺らした。

「何だお前。今更人間のフリでもするってのか？」

「ッ……もういい。ここで見掛けた時からそうだったが、やはりあなたは死ぬべきだ」

女が鎖を鳴らしながら跳躍する。まるで蛇のように枯れた木々の間を鎖が走った。

周りを囲む鎖の檻の前に、アーチャーは懷から白銀の拳銃を引き出した。

「ああ、それには全く同意見だ。じゃあな半端者、どっちつかずの貴様には、無機質で無意味な敗北がよく似合うよ」

銃口を飛翔した女に向ける。だが女はアーチャーの銃口が自身に

向いた直後に木々の中に隠れることで、巧みに照準から逃れる。
やりにくいな。アーチャーは乱れ舞う鎖と女を警戒しながら、合
わぬ照準では意味がないと拳銃を懷に仕舞った。

「……………」

直後、生き物のように動く鎖の先端が牙を向く。地を這いながら
走る杭は、違うことなくアーチャーへの心臓へと迫る。
しかし、肉を抉るはずの杭は鋼の弾ける音に掻き消された。

「なっ……………」

女が驚きに声をあげる。刺さるはずの杭は、いつの間にかアーチ
ヤーの手に握られたロングソードに弾かれたのだ。

「たまにはこういうのも悪くない」

片手で器用にロングソードを回し、アーチャーは宙に浮かぶライ
ダーを見上げた。

障害物が多い中、拘束制御術式が解放出来ぬ今はこうする他ある
まい。

不自由だが、それもいい。十全を果たせぬから負けたという言葉い
訳はいらない。これが闘争ならば、闘争は理不尽であるべきだ。

「これもまた、必然か」

ロングソードの切っ先を女に向けて、闘争の開始を宣告する。
火花を散らす鋼と鋼。皮肉にも、化け物同士の会合は光輝く太陽
の下、枯れた世界を舞台に幕を開けるのであった。

【Red Red Blood Demon・2】

魔力の流れを感じた。僅かに露出する魔力は、アーチャーに向けて注がれているを感じる。

『アーチャー？』

凜は不思議に思い、念話を送った。

『ああ、なんだマスター？』

それに対して、常とまるで変わらない飄々としたアーチャーの聲が返ってくる。

『何かあったの？ 魔力勝手に引つ張りださないでよね』

『それは悪い。何、ちょっと犬にじゃれつかれてな』

『犬？ まさか……あんた、交戦してるわけ！？ こんな朝っぱらから！？』

『ああそうさ。いいだろう？ 熱いキスはもう貰ったんだ。喉が焼けるくらいに熱い、な。ならば私も同様に返さねばなるまい』

『いや、だからあんた一般人に迷惑かけんかって』

『裏手の庭だ。誰も来ないさ』

『そういう問題じゃないでしょ！』

『さて、ではなマスター。ここからは犬と犬の噛みつき合いだ』

不意にアーチャーとのパスが途切れる。拘束制御術式という宝具さえ使わなければ、アーチャー固有のスキルである単独行動（しかも破格のランクである）で、ある程度行動はおろか、戦闘ですら可能だ。

「ちょ……」

届かなくなった念話と、流れなくなった魔力。
呆れて頭を抱えなくなるが、もう考えたところで仕方あるまい。

「先生」

凜は覚悟を決めると行儀よく手を上げた。僅かに慌ただしくなる教室内。普段こうして自ら名乗り出ることがあまりない凜のこうしたことに、驚くのも当然のことだろう。

クラスの注目を一身に集めながら、凜が考えてるのはまるでクラスのこととは別だ。

まあなんだ。とりあえず

「体調悪くなったので、帰らせていただきますね」

あのサーヴァント、一発躰ないといけならしい。

【Red Red Blood Demon・2】

散らす火花が目尻を焦がす。こつも長く刃を合わせたのはいつ以来になるだろうか。重く、速い杭の連撃を捌きながら、アーチャーは手に響く心地よい痛みに笑い声を堪えるのに苦労した。

「何が楽しいのですか？」

女がアーチャーの口に浮かばうとしている喜悦を感じて、疑問を乗せて杭を操る。

逸らした杭がアーチャーの肩を僅かに抉った。杭に巻かれて鮮血が枯れた大地を染める。

衝撃にアーチャーの巨体が揺らいだ。バランスを取り直し、揺らいだ体をまた揺らす。

笑う。

「戦いだよ」

笑う。

「戦いが楽しいのさ」

笑って、刃を振り払う。

勢いよく弾かれた杭に響いた振動が、鎖ごしに女の手にも響いた。弛緩し、僅かに動きが緩む蛇。

アーチャーは当然その隙を逃さなかった。宙を漂う鎖を足場に、女へと一気に詰め寄る。あつという間に距離のアドバンテージは失われた。

「シッ！」

脳天へ向けて斬撃が唸る。逃れえぬ絶対の機会、しかし女は空中で横にずれるという異常を持って、アーチャーの渾身を回避してみた。

虚空を引き裂くロングソード。虚しく響く切り裂かれた空気の悲鳴、驚くアーチャーを横目に、女は再度開いた距離で、空にいるめ身動きのきかないアーチャーに狙いを定める。

選択の時間は然程ない。アーチャーは五感を全開に使い、襲いかかるだろう杭に全神経を集中させた。

「狙いが正直だな」

いいながら、アーチャーは体を捻り後方に向いた。今にも突き刺さろうとする一本杭、アーチャーはしかし余裕を持って杭を上弾く。

しかし、上空に弾いた杭は、まるで意思を持つかのように予先を再びアーチャーに向けると、刃を振るい次手の用意が出来ていない脳天へと落ちてきた。

先程の意趣返しのもりだろうか。ただ一つ違うのは、アーチャーには空中で身を翻す技能がないということ。

つまり、攻撃は通るのだ。

「首を落として駄目ならば、頭を潰して死になさい」

女の嘲りが杭に晒されたアーチャーの耳に届く。だが現に今のままでは何も出来ず、女の杭によってアーチャーの頭は吹き飛ばされるしかないだろう。

一秒にも満たない先にある死、しかしアーチャーの顔には笑みしか浮かんでおらず

グチャリとアーチャーの頭が押し潰される。ミンチになった頭は、中に溜まった赤い果汁を世界にばら蒔いた。叩きつけたスイカですらこのようにはなるまい、アーチャーはそれほど見事に女の杭で頭を吹っ飛ばされたのだった。

笑みすら浮かべられなくなったアーチャーは、残った胴体を大地に投げ出した。

その横に女が降り立つ。痙攣しているアーチャーは、傍目から見て死んでいてもおかしくないが、さっきもそれで再び蘇ったのだ。

「ならば、あなたは念入りに殺したほうがよさそうだ」

女は杭を手繰り寄せると、杭を直接右手で掴んだ。狙いはアーチャーが指さした胸、心臓だ。確信があるわけではないが、ここを挟む必要があるという違和感があつた。

違和感だ。確信ではなく違和感という不可思議。胸に宿る違和感には、急ぎこの男を突き刺せと訴えてくる。

だから躊躇いはなかった。振るわれる鋼の杭は、違うことなくアーチャーの心臓を突き刺さんと切っ先を落としていき。

「残念、二秒遅いわ」

それよりも早く放たれた赤い宝石により、女の必殺は中断された。

「ッ!？」

眼前に無造作に放り投げられた宝石は、至近で破裂し業火を撒き散らす。女はその威力から逃れるために飛び退いた。

そして、宝石の投げられた方向に顔を向ける。

「御機嫌よう見知らぬサーヴァント。一介の魔術師に奇襲受けるなんてさ。あなた、注意力散漫なんじゃないかしら？」

制服の少女、遠坂凜は女の圧力に圧されぬように一歩踏み出しながら、制服の袖を捲し上げた。

冬の寒さはまるで感じない。むしろ内側から溢れる熱気が熱くてたまらないくらいだ。

「……まさか、あなたがこのサーヴァントのマスターなのですか？」

女はやる気満々といった凜にあり得ないといった口調で問いかけた。疑問は最もだ、令呪で繋がりのあるマスターならば、自身のサーヴァントが敗北した時点で逃げ出すはず。それがこうして堂々と姿を現すなど、よっぽど自身があるのか、もしくは

「無鉄砲なのですね」

「はっ？」

女が小さく笑んだのに、凜は訳が分からないと眉を潜めた。「いや……」と、女は考えるように口元を手で抑え、「バカと言ったほうがいいでしょうか」そう凜にとっては屈辱的な訂正をした。

「……随分な話ね。会ってそうそう無鉄砲やらバカやら言われたのは生涯初めてよ」

「そう言いたくなるのも仕方ないというもの。自らのサーヴァントが敗北しながら、敵のサーヴァントの前に現れるとは……あなたは私のマスターよりは勇敢だが、蛮勇がすぎる」

成る程、凜は女の言い分に納得した。確かに、傍目から見れば、自分はサーヴァントを失ったのに敵の前に出た阿呆だ。

「まっ、確かに愚かよね。サーヴァントの前に生身で出て勝つ見込みなんてあるはずないわ……」

でも、だ。

「仮にそうだとして、私は諦めたりはしないわ。最後には必ず私が勝つてみせる。優雅に、余裕をもってね」

だから、勝つのだ。

左手の魔術刻印が励起する。緑色に輝く回路と、溢れ出す魔力。

「愚かな」

女は呆れたように呟くと、鎖を再び操り空に舞う。

「その傲慢、私の手で矯正してあげましょう」

凜の周りに広がる鎖の網。どこから来るかわからない鎖を前にして、凜にはまるで焦りなどない。そもそも、ここに来たのはこいつの相手をしにきたからではないからだ。ならば、相手にするはずも

ない奴と相對して焦る通りなどあるわけがない。

「せめて、私の姿をその目に映しながら死ぬることを感謝することですね」

女が何か言っている。だが知らない。

凜の目線は、大地に沈んだアーチャーに注がれる。

「余所見するとは、余裕のつもりですか？」

女が鎖の網を狭める。だがどうでもいい。

凜は口を開いた。魔術の詠唱ではない、魔力などこもらない、ありきたりな呼び声。

しかし杭は走る。ゆえに杭が走る。蛮勇を晒す少女を食らおうと、蛇が駆ける。

だが蛇がその牙を凜に食い込ませるよりも早く、凜は何てことない、しかしある意味、魔法に匹敵する言葉を口にした。

「起きなさい、アーチャー」

瞬間、爆音と共に女の体に衝撃が走った。

「がつ!？」

女が呻きながら衝撃に吹き飛ばされた。痛みと疑問。何だ、何が起きたのだ？

「やはり、やはりあなたは素敵だ。リン・トオサカ」

聞こえるはずのないアーチャーの声に驚愕する余裕はない。女は

衝撃と共に消し飛んだ左手の傷口を抑えながら、忌々しげに口を結んだ。

急ぎ距離を置いた女の前、凜の隣にはいつの間にか黒色の拳銃を構えたアーチャーが佇んでいる。

「諦めを越えるからこそ、人間だ。素晴らしい、サーヴァントを前にその啖呵……マスター、マイマスター、リンよ。なればこそ、あなたに私はこう言おう」

女を無視して、アーチャーは凜の前に忠臣のように膝をついた。むしろ、それはむしろ主人の命を待つ犬のようでもあった。いや、そうなのだろう。凜は目の前に伏すアーチャーを見て、そう感じた。女がジリジリと後退する中で、アーチャーはそちらに見向きもしない。

今、望むのはただ一つ。

「命令 オーダー を」

犬を動かす絶対の言葉。

「命令 オーダー を。我が主」

言い終わると、アーチャーは黙して凜を見上げた。

眼差しが笑っている。戦いを、戦いをと笑っている。

こんな目をされたら、最早言える言葉は一つしかないではないか。凜は嘆息を一つすると、逃げるタイミングを計る女を指さした。

「勝つわ。わかつわね？」

「了解」

アーチャーが立ち上がる。女は沸き立つ殺気に気圧され、一歩足を下げた。

「おい、お前」

先程までとはまるで違う怒りに満ちたアーチャーの声色。

両手に持った拳銃が鎌首を上げた。ぎらつく銃口が、女の体を捕捉する。

「人のマスター罵倒して、生きてここから出れると思うなよ。この売女が」

命令を胸に、殺意を放ち、犬は従順に命を果たすために活動を開始する。

銃口を通じて感じる、獣の殺意。

「……致し方ないですね」

呼応するように、女は己の手札を切る覚悟を決めるのだった。

【Red Red Blood Demon・2】（後書き）

懐かしき日々の名残、残響するのはかつて聞いたあの日の詩。

というわけで以下の奴は暇だったので五秒で書きました

ワカメイン〜THE 麗しのワカメロード〜

ワカメは海底でぷかぷかしています（ゴボボボボ）

シンジという名前がありますがワカメです（あそれ、学校では大人気）

お父さんはどっかに行きました。おじさんはぽっくり逝きました。義理の妹はワカメのぽっくり狙ってる。

それでもワカメはワカメを食べる（あそれ、オヤツは芋虫）

それでも実はシンジって名前なの（あそれ、お先は真っ暗）

ちなみに魔術の素質は凄いです。でも魔術回路はワカメの栄養分になったのでありません。性癖は内緒なーのーさー。

そんな私は古本屋でりりむキッスを立ち読み中（海底二万マイル辺りでふうっふー）

【Red Red Blood Demon・3】

「……不味いですね」

女は、自身の窮地を感じずにはいらなかった。
何故死なないか疑問はある。動かない左手で戦うには些か不安だし、第一これ以上の戦闘は今のままでは厳しい。
だが女にはまだ手札がある。今それを切るのは少々危険だが、

「仕方ない、か……」

一刻の猶予すら、もつないだろう。

「アーチャー、でよろしいんですね？」

「……」

答えるつもりもない。女は一貫したアーチャーの態度に、再び内心で仕方ないと呟く。

「私のクラスは、ライダーです」

女、ライダーは僅かな躊躇いもなく、そう自身のクラスを打ち明けた。当然気にした素振りすら見せないアーチャーだが、これに疑問を持ったのは凜だ。

あまりに唐突な露呈に疑念を持つ。何故、今更そんなことを言うのか

「ッ……………!？」

だが疑問はすぐに氷解する。こんなこと、馬鹿でもわかるはずだ。クラスを明かすということ、それはつまり。

「宝具!？」

一目でそれだとわかることを、するに違いないのだから。

「……………!」

凜の叫びに呼応して、アーチャーはジャッカルを引き金を引いた。爆発する熱量、人体はおるか、サーヴァントにすらダメージを与える鋼の顱がライダーへと走。

「あ……………」

二の句を告げる暇などない。狙いを違わず撃たれた弾丸は、ライダーの首を僅かにかすらせ、その首の肉を根こそぎ奪っていったのだった。

僅かに狙いが逸れたものの、アーチャーの弾丸はライダーの首筋を抉った。半分程の肉を奪われ、肉の檻から解き放れ、内部に包まれた血が行き場を求めて空を舞う。

致命だ。凜は溢れた鮮血の量を見て確信する。

「……ハッ」

アーチャーが笑い声を漏らした。銃口を向けたままに、乾いた笑いを乾いた森に響かせる。勝利を確信した笑いか、或いは、そう。

「では、ライダーらしく本領を見せましょう」

新たな火種への、歡喜故か。

「喋っ……」

首の肉を半分奪われたはずのライダーが話したことに凜が驚愕する。アーチャーの規格外を見ながら、いや、だからこそ、アーチャーのように首を千切られても生きられるような異常に驚愕を隠せない。

だが、真実は微妙に違う。凜はライダーがアーチャーのような規格外と思っていたが、実際はライダーにそこまでの耐久力はない。

全てはそう、今は知る術もなきライダーの伝承

「これは……!？」

凜は暴れだす大気を前に、腰を屈めて目を細めた。空気が膨大な魔力の流れに振動する。その振動の元凶、ライダー

の前に、溢れ出した鮮血が渦を巻き、術式を虚空に刻む。

不味いなんてものではない。流出し、収束し、霧散し、肥大する魔力は、明らかに規格外の一品。

血の陣は、例えるなら眼みたいだった。ライダーの目と同じく、押し留められた眼。

それがゆつくりと魔力の肥大と共に開眼していき

「では、いずれまた」

「冗談……！？アーチャー！」

凜が眼の射線から抜け出すために真横に飛んだ。同時にアーチャーの魔銃の頭が再度開かれ咆哮する。情け無用の二丁拳銃による全弾射撃、音速で駆ける魔弾を前に、ライダーの陣は目を開ける程度の動作しか叶わず。

それだけで、全ては終わった。

「！」

声すら残らない。見開かれた眼は、展開された魔弾を食い破りながら一直線に走り抜ける。

衝撃と閃光に、射線から逃れた凜であつても余波に耐える以外何も出来ない。それほどの威力、それほどの一撃を前に、アーチャーは何も出来なかった。

「……なんて威力」

衝撃が過ぎ去った後、跡形もなくなったライダーが残した破壊の後を見て、凜は悪態をつく他なかった。

地と木々を抉り、一直線に刻まれた破壊の傷痕。無論、射線にいたアーチャーがその破壊から逃れうる術などなく、両手足以外を文字通り貪り尽くされ、千切り飛ばされた四肢が様々な方向に転がっている。

だが凜はアーチャーのことは心配などしていない。一方的に遮断されたラインは既に回復しているのだ。

「……」

立ち上がり、体についた土を叩いて落とす。と、体から奪われる魔力と共に、ぐちゃぐちゃにされたアーチャーが凜の影からユルリと傷一つない体を起こした。

この様では、森に敷いた防音結界も吹き飛ばされたに違いない。今頃、学校の方では突然の事態に慌てふためいているはずだ。

惨状と、遭遇したにも関わらず、取り逃すという失態。

「今回は完敗ね……悪かったわアーチャー、邪魔しちゃった」

凜は素直に敗北を認めた。完全にやられた、サーヴァント戦に無謀にも出向き、決めるべき場面で解放を渋る。恥の上塗りだ、どうやら昨夜の勝利がサーヴァントに対する慢心を凜に植え付けたのだろう。

「いや、気にするなリン。お前は、お前がやると決めたことをやればいい。今までも、これから。そのために必要な弓と矢は私が用意しよう。リン、お前はただ赴き、踏破し、歩くだけでいいのだ」

だがアーチャーは別段気にした素振りを見せず、むしろその愚かな歩みを是とする。良いのだと、何が正しいのか、悪いのかではない。

例えどんな愚行でも、選択をしていくことに人間の可能性があるのだから。

「それとも、お前は自分の歩みを後悔しているのか？」

「ええ、それはもう。後悔なんて山のよう」

アーチャーの問いに、凜は堂々と答える。そして、アーチャーを見上げ臆することなく、

「でもね、その時の私にはそれが最善だったのよ。だったらそれを後悔出来る今の私は、きっと昔の私より最善を尽くしていけるはずよ」

強く強く、断言してみせた。

暗い暗い部屋だ。明るさ等微塵に感じる事が出来ない、それは、物理的な明るさの問題ではなく、ただこの部屋、いや、この屋敷の内部が醸し出す邪気に似た気配のためだろう。

そんなじめじめとした閉鎖空間の中、響いたのは骨と骨がかち合う鈍い音。音の発生源は、先程アーチャーとの戦いを切り抜けたライダーの頬からだ。

「クソ！ 何なんだよ！ 何で逃げちゃってるわけお前！？」

ライダーの前でヒステリックに叫ぶのは、彼女のマスターである間桐慎二だ。先の戦いの報告を聞き、苛立ちを隠せずにいた。

彼は間桐という魔術の家系に産まれたものの、魔術回路を持つことが出来なかった人間だ。それを祖父の手を借りることでマスターになることが出来た、いわば仮初めの主である。

しかし、サーヴァントを使役出来ているという満足感が、今の慎二を増長させていた。サーヴァントさえあれば、自分なら容易く聖杯戦争を勝ち抜けるはずだと。

だがその伸びきった鼻はいとも簡単にへし折られた。先の戦い、何とか脱出し、凜を驚かせることが出来たが

「何だよアイツ！？ し、死んでも死なないなんてあり得ないだろ！？ お前、手加減したんじゃないだろうな！」

「いえ、今の私ではあれが限界でした。魔力量に限りがある現状、宝具を無闇に使用するのは極力避けたかった」

「くっ……… だったら早く結界を発動して魔力を集めればいいだろう？」

「それは無理です。結界の展開にはまだ暫く時間がかかります」

「あああ！ うるさい！ 何とかしろ！」

ライダーを通して見たアーチャーという規格外。悔しかった、何故、何故自分ではなく、凜にそのようなサーヴァントがいつのだろうか。

「クソ！」

手近な机を蹴り飛ばすが、溜飲は下がらない。理解してしまった、あの化け物には『自分ではまるで勝つ可能性がない』という事実を。だが慎二は認めない。認めれるということは、自身が劣っているということに他ならないのだから。

「ですが、結界に拘らないのであれば」

「方法があるのか？」

「ええ」

頷くと、苛立つ慎二にライダーが提案を持ちかける。その説明を聞いて、慎二の口が歪な笑みを浮かべた。

「ハ、ハハ……何だよ、ならそれでいいじゃないか。直ぐにやるぞライダー」

「わかりました」

了解の意を示すと、ライダーは霊体化して姿を消した。後に残るのは追い詰められた人間のようになり、卑屈に笑む慎二が一人。

「やってやるさ。誰にも負けない、負けてやるか……僕が、僕が一番なんだからなあ……！」

「ふう……まっ、これで一応は大丈夫かな？」

事後処理の連絡を教会に報告した凜は、慣れない携帯電話の操作にやや精神的な疲労を覚えたのだ。

「押せば繋がるように綺礼に設定してもらったからよかったわ。携帯持って苦手なのよね」

あー、うー、とフェンスに体重を預けて凜は溜め息を吐き出した。冬の学校の屋上は冷たい。溜め息が白い湯気となって虚空に消えていく様を見ながら、凜と、その隣にいるアーチャーの考えはやはり先程の戦いのことを考えていた。

「あいつが結界を張った犯人でいいのかしら？」

「さあな。もしかしたら昨夜会ったあの小僧かもしれないぞ？ 確かアレも学友なのだろう？」

学友と皮肉げに言うアーチャーが可笑しくて凜は鼻を鳴らした。

「アーチャー、衛宮君は学友でもなければ結界の犯人でもないわよ」

「根拠は？」

「あれはただ偶然にマスターになっただけよ。あなたも聞いていたでしょ？」

「……偶然、ねえ」

アーチャーの呟きは風の音に掻き消され凜の耳には届かなかった。

凜はさらに続ける。

「ともかく、あれが今回の犯人として、あんな結界内の人間の命を根こそぎ奪う結界を張るようなサーヴァントとマスターよ。なら、最近新都で話題になつてゐる昏睡事件にも関わりがあるかもしれない」

「人食いをしてると？」

「かもね。そしてついさっき私達は交戦して、あなたの馬鹿みたいな能力を相手は認識した。つまり」

「新たな力を求めて、ライダーは新都で人食いをする」

「ビンゴ」

凜はフェンスから体を離すと、向かい風から真っ向に立ち向かいながら堂々と立った。

背後には当たり前のようにアーチャーが立った。静かに立つ様は、主君の命を待つ犬の如く。

「命令は一つよ。調子に乗つてゐるアホをボッコボコにとつちめる。異論は」

「無論」

凜は振り返りながら、アーチャーの薄ら笑いを見て、口元を吊り上げた。

「じゃあ、行きましょう」

赤の主が夕焼けに消えていく。最早振り返るといふ選択肢はなく、ひたすら前へ前へと進む、それはまるで戦女神のように凜々しく、気高い姿だった。

「……」

そしてその背中を見送る一人の男は、愉快だと喉を鳴らすと血色の槍を携えて誰もいなくなった屋上を後にした。

化け物に魅せられた哀れな道化の暴走は静かに始まる。今宵、決戦の火蓋は道化の滑稽な踊りより、蛇に誘われ集まる英霊は三騎。

そして月夜の時間は悪魔が時間。紅の主を引き連れて、今再び化け物の夢は幕を開ける。

【Red Red Blood Demon・4】

何かが狂っている。

息を荒々しくさせながら走る。振り返りはしない、背後を見た瞬間、私の足は脳からの信号を無視して停滞するのがわかるから。そして、止まったりすれば、背中に絡み付く恐怖が私を食らい尽くすだろう。

だから私は走るのだ。決死で、必死で、死に物狂いで、恐怖から逃れるために死を覚悟する。

しかし私のそんな抵抗もまるで意味をなさない。恐怖は背中からどんどん這いより、数秒後には私という存在を食らい散らすはずだ。だがわかっていても歩みは止めない。どんなに醜くたっていい、どんなに無様だっていい、私の疾走がたった数秒の命を繋ぐだけだとしても、私が私であるために、この走りは

「あっ……」

突然、何かが私の手を掴んだ。万力に挟まれたように体の動きが停止して、つまり私は恐怖に丸ごと呑み込まれていて。

「食らえ、ライダー」

何処かから、見知った誰かの声が聞こえたような気がしたが、最早その声に耳を貸す余力すらない。

首筋に走る激痛。

「あああああああああつ！」

まるで五感の全てが痛覚に変わったかのような痛みの嵐にまみれながら、私、美綴綾子の意識は奈落の底へと沈んでいった。

【Red Red Blood Demon・4】

「……シロウ、サーヴァントが見つかったわ」

今日から始めることになった夜の探索の最中だった。白い息を吐きながら、まるで探索のことなど頭にないかのように無邪気に遊んでいたイリヤスフィールのあまりにも唐突な一言に士朗はどう返事をすればよいかわからず、言葉を詰まらせてしまった。

「相手はアーチャーですか？」

「いいえ、これは……新しいサーヴァントね」

「そうですか」

代わりに答えたのはセイバーだ。今は甲冑ではなく、衛宮邸にあったダークスーツに身を包んでおり、見た目はまるで美少年といった姿である。

始めにその姿を見たときは困惑したもののだが、元は性別を隠して王を名乗っていたセイバーだ、着こなすと動き共に違和感なく、すっかり士郎も見慣れてしまった。

おかげで我が家のトラと桜にイリヤとセイバーを紹介する際も、ある程度すんなりと（イリヤが切嗣の娘だという事実には一波乱あったりしたが、トラ的に）暫く居候することも許された。

閑話休題。ともかくとして、遊んではかりだったイリヤの言葉に半信半疑ながらも、「一体何処に現れたんだ？」と士郎も言葉を重ねる。

「新都の……ほら、ここ。どうやら一般人を襲って魔力を蓄えてるみたい」

「っ……!？」

淡々とイリヤに告げられる事実と、額に触れる手から脳に叩きつけられる補食の情景に、士郎は怒りのあまり拳を作った。浮き出る血管が怒りの大きさを表している。

「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

そんな士郎の焦りを理解しながら、あえてわかりきった問いをイリヤは投げ掛けた。

「決まってる。一般人が襲われてるなら……助けにいく」

当然と、士郎の返事は打って響く。

だが覚悟を決めた士郎と対照的に、イリヤの表情は冷めたものだ。つまらなそうに目を細め、じっと士郎を見上げている。

「どうしたイリヤ？」

「……別に、ただもうお兄ちゃんとのデートがおしまいだと思っただけ」

「デートってなあ……」

どう返せばわからず、士郎は苦笑しながら頬を掻いた。

「ともかく、今は一刻を争うはずだ。セイバー」

「はい」

「先に行つててくれないか？ イリヤ、セイバーに場所を教えてやつてくれ」

「いいわよ。来なさいセイバー」

言われるがまま、イリヤの前にセイバーは寄ると、士郎と同じやり方で位置を把握する。

得体の知れぬサーヴァント、緊張にセイバーは握りこぶしを作った。

「問題ありません。場所は掴めましたので先行します」

「頼んだ。それとアーチャーが現れたら……」

「ええ、イリヤスフィールとマスターに任せます」

士郎が言い終わるより早くセイバーは飛翔すると、ビルを足場に瞬く間に消えていった。

その背中を見送ってから、士郎も「行こう、イリヤ」と言って駆け出した。

「ちょっとシロウ！ レディを走らせるつもり！」

イリヤの呼び掛けにも目もくれず、士郎は瞬く間に夜闇に消えていく。

嘆息。猪突猛進な彼に呆れながら、まあいいかと妥協する。

「もう、せつかちなんだから……バーサーカー」

イリヤの号令に、先日 of 傷も完治したバーサーカーが背後に現界した。

蒸気のように熱い吐息を吐きながら、ただ主に手を差し出す。

イリヤが大きな掌に乗りこむと、バーサーカーは優しくイリヤの乗った掌を肩に回した。

緩やかにバーサーカーの肩に座ると、少女の無邪気な眼差しは、無慈悲な魔術師のそれへと変貌する。

「跳びなさい」

野生の雄叫びが夜空に響く。その咆哮の後には何も残らず、ただ踏み砕かれたアスファルトだけが最強の蹄を物語っていた。

ビルの間を飛びながら、直感を頼りに目的地へと向かう。戦場へと赴くことによる武人としての僅かな高揚を感じながら、セイバーが考えるのはアーチャーのことだ。

おそらく奴は現れる。数多の戦場で自分を救った直感がそう告げている。

意識せずとも、セイバーは不快に目を細めた。あの醜惡な姿が苛立たしくあり、怖くもある。英雄として、人外のそれに対する恐れは人一倍だ。

だからこそ戦えるのだが。恐怖を知るゆえに、それ以上の勇気を發揮して活路を見い出すことが出来る。

「いや、今は忘れよう」

あえて声に出すことで、アーチャーのことを一旦脳裏から追い出す。戦地は近い、到達はもう

「はあああああつ！」

乾坤一擲。一般人に牙を突き立てている敵に奇襲も何もない。

「っ！？」

セイバーが上空に現れた時には、相手も既にこちらに気付いていた。牙を引き抜き、その手に掴んでいた少女を放すと、強襲を迎撃せんと鎖つきの杭を顕現させる。

直後、セイバーの威力が敵、ライダーを杭もろとも吹き飛ばした。

「くう……」

何とか壁に足をつけ衝撃を逃すライダー。そのライダーと少女、綾子の間に立ち塞がるようにセイバーが立つ。

「魂食いとほな。英雄としての誇りはどこに消えた」

凜としながら、明らかな怒りの伴ったセイバーの声。対峙するライダーは、一瞬呆然とした後、あまりにもくだらないセイバーの言葉に怪しく口元を笑みに変えた。

「何を言うかと思えば……死して誇るものなどありはしないと言うのに」

「貴様……私を侮辱するか」

見えない剣を携えて、セイバーが構えをとった。見えずともわかる殺意に応じて、ライダーも体を屈め臨戦に入る。

刹那の硬直。動いたのは最優のサーヴァントだ。

魔力放出による絶大な恩恵による速力は、さながら地面を爆発させ、その爆風で走るようである。十歩以上あった距離が、たった一足により失われる絶技。しかしライダーはその速さすら凌駕し、壁伝いに中空に飛んだ。

初撃を空振りに終わらせたセイバーの上空を、蜘蛛の巣のように張り巡らされた鎖が覆う。

「あなたも牙を突き立てられなさい！」

不規則に走る鎖と、闇に隠れた杭がセイバーの死角を捉え、真下から襲う。

「はあ！」

だがその程度防げずして最優は名乗れない。直感を頼りに、杭を見ずして跳躍により回避したセイバーは、勢いのままに空を這う鎖を足場にライダーに再びの突貫を行う。

「中空では逃れられまい！」

「それは　あなたも同じだ！」

刃の内にライダーを収めたセイバーが必殺を確信するより早く、真横からの悪寒に堪らず剣の腹を横に構えた。

鈍い衝撃、剣の腹に当たった杭がセイバーを押し出す。

当然、足場無しに踏ん張ることなどで出来ず、先程と立ち位置が代わり、セイバーが吹き飛ばされるはめになる。

杭を弾き、ビル壁に剣を突き立てた。即座に襲いかかる杭から逃れ、最初の立ち位置に二人が戻る。

「……」

速く、重い。機動性と単純な力なら、セイバーを越えているだろう。

だが、それだけだ。

「これだけなら次で終わりだ。クラスも知らぬサーヴァントよ」

ただ速く重いだけで、白兵の技量はセイバーと比べ遙かに見劣りする。

ライダーもセイバーの言葉が虚言ではないことがわかってる。

たった二度刃を交わしただけで、自身の動きが見切られたという驚愕の事実。

これが最優のサーヴァントのセイバー。圧倒的な実力を前に、最早切り札を切るしかないというライダーも覚悟を決めた。

セイバーの眼差しもより鋭く光る。幾度も彼女を救った直感が、セイバーに危険を知らせていた。

ならば、危険が目覚めるより速く断つのみ。覚悟は両者共に、今、必殺を確約し

「おっと、悪いが……本当に悪いが、邪魔するぜ？」

場を乱す新手の存在。セイバーとライダーが、同時に声の方角に目を向けると、そこには暗闇にも映える深紅の魔槍の担い手が一人、本当に申し訳なさそうな表情で立っていた。

【Red Red Blood Demon・5】

テーブルを挟んで座るアーチャーが、優雅に背を椅子に預けながら、自身の武装である白と黒の鋼を解体して中を確認している。凜は紅茶のカップを弄びながら、まずお目にかかることがない銃器の手入れを眺めていた。

耳障りな不快音 ではない。むしろ、リズム良く調整されていく銃器の奏でる旋律は、いつか授業で聴いたストンプという音楽を連想させた。

「……にしても、解体される宝具つてのも不思議よねえ」

部品の一片まで解体されたジャッカルに驚き混じりの声を漏らす。存在が神秘である宝具は解体されて尚、魔力の残り香を充満させており、凜の目をまるで飽きさせることはない。

「銃器であれ、それがそういう在り方をするなら、そうなるのが宝具というものだ。ともかく、自由のきかぬ身だが、こういうプレゼントは嬉しいかぎりだね」

そんな凜を横目にして、アーチャーは部品の点検する手を休めることなくそう言う。

プレゼントという言葉に首を傾げる凜に、アーチャーは説明する必要もないと作業に集中した。

虚数になる前に破壊されたジャッカルが今こうして手元があり、

しかも宝具として存在の価値が破壊される前よりも遥かに上がっている事実。

とは言え、威力も上がったジャッカルがあるから何かが変わるわけではない。ライダーには何とか一撃を通せたが、ここまででセイバー、ランサー、バーサーカーの三騎にはジャッカル破壊力すら通ることはなかった。

決め手に欠ける、というのが現在のアーカードと凜の現実だ。それでも無限に近い魂のストックによるアドバンテージは圧倒的だが、いずれ決め手がないという弱点を突かれるかもしれない。

何もアーカードを倒す必要はなく、凜を狙えばいいだけなのだから。

だがアーカードも凜も、マスターが狙われるということに関してはわかっていて。わかっているからこそ、問題がない。

「……悪くない。完璧だ」

組み立てを終えた二丁拳銃に、マガジンを込めて弾丸を込める。シャコンという渴いたスライドの音が、無骨なミュージックの終わりを告げた。

「じゃあ、行きましょうか」

「ああ行こう。戦禍の鐘を鳴らしに行こう。今夜はきっと、素敵な夜に違いないからな」

飲み干したカップをテーブルに置いて、凜が静かに立ち上がる。その背中に付き従う従者のように、アーカード、アーチャーも立った。

問題などまるでない。何故ならそんな問題すらも踏み散らして、赤き主従は勝ち残れる自信があるのだから。

夜の闇に、今再び悪魔の声が鳴り響く。

【Red Red Blood Demon・5】

戦局が凍る。槍兵の参加により、新たな戦いに変貌しかけた戦いが霧囲気を変えた。

セイバーもライダーも、まさかこの場面での乱入を予期していなかったので、僅かながら緊張の面持ちでランサーの出方を伺っている。

「ちっ、やりにくいったらありやしねえ」

堪らず、ランサーは苛立たしげに舌打ちをした。彼としても今回の乱入は本意ではあるが、現在のマスターから『ライダーを殺すな』という新たな命令が下ったので仕方ない。その意味することは知らないが、大方アーチャーに対するために味方が欲しかったというところだろう。

ともかく、ランサーは今戦う気などあまりなく、如何にしてライダーを逃がすかしが頭にはない。

「……セイバー、ここは引け」

めんどくさそうな表情から一転。ランサーが静かに槍をセイバーに向けた。ランサーの意図がわからないライダーとセイバーにも、槍の矛先が示す意味はわかる。

いつでも迎え撃てるように、セイバーが見えない剣を握り直した。距離は置いているが、ランサーとライダーの敵意はセイバーに殆んどが向いている。

「……断る。そう言ったら？」

「ハッ……そいつは仕方ねえ」

口元だけを笑みに変えるランサーの眼差しは、セイバーの一言に笑うことはない。

「悪いが、俺の相手をしてもらっぜ？」

殺意が充満する。一点に研ぎ澄まされた殺意の牙は、違えることなくセイバーを捉えた。

背筋を走る悪寒。最初の戦闘で放たれたランサーの宝具の記憶が蘇る。恐怖、あるいは武者震い。どちらともとれる震えがセイバーの総身を揺るがせた。

ランサーの横で逆転を確信したライダーが微笑して、杭を持ち直してセイバーに向ける。

「……」

2対1。つい先日のように思い出す忌々しい初めての聖杯戦争を思い出す。嫌々ながら戦おうとするランサーと、こちらに敵意を見せるライダー。

なら、もしこれがあの日の焼き増しならば、援軍が現れるのもまた通りである。

「っ……！？」

ランサーとライダーが、唐突に目を見開いた。遠くから気配を押し殺すことなく迫る圧倒的な存在感。

それが、地鳴りを起こしながら降り立った。

「ちい！？」

セイバーの隣に、ミサイルでも着弾したかのような爆音が響く。アスファルトが粉になり粉塵が一带を覆った。

「よかった。間に合ったみたいだね」

その渦の中心から、破壊を撒き散らしたにしてはあまりにも幼い少女の声が聞こえた。

ライダーは未だ知らないために疑問を頭に浮かべるが、ランサーは一度聞いたことのある声に、苦々しくも、嬉々とした溜め息を漏らした。

「いいじゃねえか。こういう状況なら悪くはねえ」

ランサーが槍の一振りで粉塵を散らした。勢いよく巻き上げられる煙の奥、ランサーとライダーを見据えるのは幼い少女の眼差しではなく、狂気に狂う最強の戦士。

「
ッッッ！」

バーサーカーが吠える。敵を前にしてたぎる戦士の体からは、粉塵とは違う濃厚な死と魔力の煙が溢れており、それはここら一帯を包んで未だ余りある。

それは究極の暴力だ。放たれば、全てを無造作に喰らい尽くす悪鬼の類い。その担い手たるイリヤは、バーサーカーの肩から緩やかに大地に降り立つと、セイバーの隣に並んだ。

「感謝しなさいセイバー。私達がいなかったら少し危なかったわね」

「……確かに、助勢には感謝します。イリヤスフィール」

「貸しにはしないで置いてあげる。どうせすぐ返してもらうことになるから」

最強の肩から降りたイリヤには余裕などまるでない。先日までなら、例えどのような敵を前にしても余裕を崩さなかったイリヤが、たった一戦交えただけのアーチャーを思い出す夜の闇にいただけ。今にも叫びたくなるような恐怖にかられているのだ。

白状しよう。イリヤスフィールはアーチャーが怖い。例えどんな仲間がいても、これより先どんな敵に会っても、あの恐怖から逃れられるとは思えないからだ。

「……そういうことだから、任せたわよセイバー」

だが決してその恐怖を溢れさせない。イリヤスフィールは、アイツベルンであるとか、聖杯であるとか、そんなことよりもアーチャーを許せないから。恐怖の権化に捕らわれたからこそ、最早戦うしかないことを理解したからだ。

「はい。剣に賭けてあなたの期待に応えましょう」

セイバーもその覚悟がわかっているからこそ、力強く頷いた。
その強い決意が伝わり、イリヤの顔にも僅かな微笑みが浮かぶ。

「ええ、お願いね」

そう言うと、イリヤはバーサーカーの影に隠れるようにその場から消えていった。セイバーはイリヤがいなくなったのを確認してから、殊勝にも待つていたランサーとライダーに向き直る。

「待たせたな」

「いやなに、気にするな。末期の会話を邪魔するほどに腐っちゃいねえよ」

こいつは違いかもしれないけどな、とランサーは横目でライダーを見た。

「……」

話す気もないといったライダーに、やれやれとランサーは呆れて首を振る。

だが語らずとも、敵が共闘している以上こちらも共にしなければならぬことは理解している。

「……」

「……」

「……」

「……」

誰とも言わず、なるべくして会話は途切れた。夜の静寂では、遠くの車の音がイヤに鮮明に聞こえてくる。それは人々の平穩の音色だ。ならば、安らぎが遠く聞こえるこの場所は、平穩とは対極の位置、戦禍の混沌だと言ってもいい。

だが、混沌にしては静かだった。いや、混沌だからこそ静かだった。嵐の中心が静かなように、混沌の中心もやはり静かだ。

「……」

だからこそ不自然だった。混沌ゆえに静寂が是だというのに、それはあまりにも不自然だった。対立する四者のどれもが嵐であり、だからこの静寂は嵐が激突する直前の静寂、一瞬のものでしかないことをわかっているから、長い静寂が不自然で、不気味だった。

いや、その矛盾の正体を全員はもう理解していた。

セイバーは異常な直感で。

バーサーカーは剥き出しの本能で。

ライダーは奥に眠る魔性で。

ランサーはこれまで積み上げ、鍛えてきた闘争を嗅ぎとる嗅覚で。各々が、嵐の予感を理解していた。

そして誰もが空を見上げた。

「熱い熱い、風を感じる」

大きな月を、少し欠けている月の光を、いや、その月下に揺れる赤い化け物を見上げていた。

ビルの屋上にそれはいた。月の光がその輪郭を象る様は、月に

作られた穢らわしい染みを彷彿とさせている。

「熱砂のように身にまとわりつくような殺意のうねり。冷たく内臓に突き刺さるような殺意の息吹き。目を干からびさせる殺意の奔流……」

やはり来たかと、誰もが憎しみを抱いて奴を睨みあげた。だが、月の染みたるそれは、影にすぎないその顔を喜悦に歪め、あらゆる憎悪に食指を働かせている。

ビルから影が落ちた。その着地点は丁度四者の対峙するその中心。憎悪に導かれるように、影はぬるりと落ちてきた。

理解は速く、サーヴァント達の目付きが変わる。今こそ特大の嵐が赤い輝きを放ちながら顕現したのを感じて、英雄としての本能のまま、舞い降りたそれに憎しみを叩きつける。

「戦禍の咆哮」

四者の手札 武器 が場に晒された。向かう先は赤い赤いゲームマスターただ一人。

殺意の渦巻く死の嵐、一人嵐にさらされて、アーチャーはやはり化け物らしく頬を弛ませ激鉄をあげた。

「闘争の風を……」

化け物が再び戦いに赴く。ここに、悪魔の指揮者を招き入れ、戦争音楽はその幕を上げるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5858s/>

夢のはざまで笑う化け物

2011年11月23日14時54分発行